

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成  
—女性の役割を見据えた知の国際連携—

# 大学間連携イベント 「国際協力ボランティアを知ろう」 実施報告書

2015年3月

お茶の水女子大学グローバル協力センター



## はじめに

お茶の水女子大学グローバル協力センターでは、紛争終結国等における平和構築と開発に関する調査、教育、実践を目的とする「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成」事業を平成 22（2010）年から実施しております。本冊子は、この事業の一環として 2015 年 2 月に実施した大学間連携イベント「国際協力ボランティアを知ろう」の実施記録と参加者による報告を取りまとめたものです。

お茶の水女子大学、奈良女子大学、宮城学院女子大学の 3 校から参加した学生は独立行政法人国際協力機構（JICA）二本松青年海外協力隊訓練所において、これからアジア・アフリカの途上国へボランティアとして派遣される予定の訓練生の方々と交流し、2 年間の任期を終えて帰国された元ボランティアの方々の経験を直接伺うことで、「国際協力」や「ボランティア」をより身近に感じる貴重な機会を持ちました。また、東日本大震災をきっかけに福島の若い女性によって設立された「女子の暮らしの研究所」代表の日塔マキさんからは、2011 年の震災・原発事故を経て女性たちが自らの生活の中から生まれた気づきやニーズに沿って創意工夫を凝らした様々な活動を展開し、男性や県外の人びとを含むネットワークを広げていらっしゃる様子をご紹介いただきました。

本事業の実施にご協力、ご支援いただいた講師の皆様、JICA 二本松の北野所長他スタッフと青年海外協力隊訓練生の皆様に深くお礼申し上げます。

2015 年 3 月

国立大学法人 お茶の水女子大学  
グローバル協力センター長 北林 春美



## 目 次

はじめに

1. 活動の概要	1
(1) 活動の目的	
(2) 実施日時	
(3) 実施場所	
(4) 講師	
(5) プログラム内容	
(6) スケジュール	
(7) 参加者	
2. 参加者報告	5
3. イベント終了後参加学生アンケート集計結果	49
4. 写真	53



# 1. 活動の概要





## 1. 活動の概要

### (1) 活動の目的

途上国に住み、社会の中で現地の人々とともに働く国際協力ボランティアの役割や、ボランティアになるために必要とされる資質、ボランティアの活動から得られるものについて理解を深める。また、東日本大震災後に様々なビジネスや情報発信を行う福島県の女性起業家のお話を伺う。

(2) 実施日時：2015年2月12日（木）から2月13日（金）1泊2日

(3) 実施場所：JICA 二本松青年海外協力隊訓練所

### (4) 講師

北野 一人氏 JICA 二本松青年海外協力隊訓練所 所長

田中 俊氏 元青年海外協力隊員 ウガンダ国派遣

佐藤 真奈氏 元青年海外協力隊員 バングラデシュ国派遣

日塔 マキ氏 株式会社 GIRLS LIFE LABO 「女子の暮らしの研究所」 代表

### (5) プログラム内容

選考試験に合格してアジア、アフリカ諸国に派遣予定の青年海外協力隊候補者が訓練中の独立行政法人国際協力機構（JICA）二本松訓練所を訪問した。訓練所所長による JICA ボランティアの説明、ウガンダ、バングラデシュでの協力隊経験者 2 名による講義を受講し、ガーナ、モンゴルなどへ派遣予定の候補生との意見交換を行った。

ボランティア経験者の方々からは、志望の動機、現地での具体的な活動の内容や異文化での生活・仕事で直面した困難や喜び、ボランティアとしての経験が帰国後どのように役立っているかについて具体的なエピソードを交えながらお話いただいた。

参加学生は講義やディスカッションから得た発見や感想をグループで取りまとめ、訓練所スタッフの前でプレゼンテーションを行った。

最後に（株）GIRLS LIFE LABO 「女子の暮らしの研究所」日塔氏より、社会企業として東日本大震災後に情報発信し、ビジネスを行っている活動について講義をいただいた。

### (6) スケジュール

時間	内容
2月12日（木）	
07:30	お茶の水女子大学 発
12:00	JICA 二本松青年海外協力隊訓練所（以下 JICA 二本松訓練所）着

12:30	昼食 (JICA 二本松訓練所食堂)
13:30	JICA 二本松訓練所見学
14:00	講座「JICA 事業/JICA ボランティア事業概要」
15:00	JICA ボランティア経験者 (元青年海外協力隊員) による講義とディスカッション
18:00	夕食 (JICA 二本松訓練所食堂)
19:10	派遣前の訓練生との交流
23:00	消灯
2月13日 (金)	
06:30	訓練体験参加「朝の集い」
07:10	朝食 (JICA 二本松訓練所食堂)
08:00	片づけ、荷物整理、退室 (チェックアウト)、部屋チェック
09:00	グループ・ミーティング、振り返りと学習成果発表
10:30	(株) GIRLS LIFE LABO「女子の暮らしの研究所」日塔氏講演
11:35	昼食 (JICA 二本松訓練所食堂)
12:30	荷物整理、挨拶等
13:00	JICA 二本松訓練所 出発 お茶の水女子大学 着

(7) 参加者

- お茶の水女子大学 9名 (内ベトナムより交換留学生1名)  
 奈良女子大学 5名 (内大学院生1名)  
 宮城学院女子大学 5名  
 引率 2名 (グローバル協力センター北林准教授、福井特任講師)

参加者内訳

学部 学年	お茶の水女子大学				奈良女子大学				宮城学院女子大学
	文教	理学	生活	院	文学	生活環境	理学	院	学芸
1	5								2
2			2			3			3
3			1		1				
4									
留学生	1								
M1								1	
小計	6	0	3	0	1	3	0	1	5
合計	9				5				5

## 2. 参加者報告書



## グループ 1

五十嵐由華（お茶の水女子大学文教育学部 1 年）

石川文絵（お茶の水女子大学生生活科学部 2 年）

野内瑞生（奈良女子大学生生活環境学部 2 年）

上田かすみ（宮城学院女子大学学芸学部 1 年）

### 五十嵐 由華

お茶の水女子大学文教育学部 1 年

#### JICA 二本松での講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと

『ボランティア』これは、非常にいい響きの言葉です。私たちは、小学生のころから、地域のボランティアに参加したり、世界でのボランティアの働きについて習ったりして、ボランティアがどれほど素晴らしいことなのかを学びます。そして、積極的にボランティアに参加することを勧められますし、場合によっては強要されることもあります。今や、ボランティア参加の経験が、個人への評価基準になりうることもありますし、学校の授業で、あるいは、会社の営業の一環でボランティアをすることが、社会的評価につながります。そんな風潮の中で、ボランティアなんて面倒くさい、と思う人はいても、ボランティアは良いことである、ということ自体に疑いを持つ人はいないでしょう。

しかし、より詳しく学ぶと、ボランティアによってもたらされる、さまざまな影響が見えてきます。例えば、文化の違いによる摩擦。物資や技術を提供する側と、される側という、作られた立場による蔑視。問題解決策の、非継続性。そのような現実を知った時、私は、『ボランティアとは何なのか、何を目指したものなのか』という疑問を持ちました。一般的には、ボランティアは、『無償の奉仕活動』と定義されます。つまり、『見返りを求めずに、人のためになることをする』ということでしょう。私は、それは実現することとはとても難しいのではないかと思いました。まず、『無償で』できる人が本当にいるのか、という点です。実際、ボランティア募集の宣伝を見ると、『就職で有利』だとか、『推薦入試でアピールできる』だとか、そういった利益が必ず記されています。それをふまえると、やはり何かをした時に、返ってくるものがないと、人は行動を起こすことが難しいのではないかと考えました。また、『人のため』というのも、難しいことだと思いました。人はそれぞれ、様々な考えや、文化、生活スタイル、信仰やポリシーがあります。それを、いわゆる先進国によって作られた文化である、『ボランティア』によって本当に解決できるのだろうか、と私は思いました。

私の今回のプログラムへの参加動機は、ここにありました。実際にこれからボランティアに行く人たちに、『ボランティアには、どうして参加するのですか』と聞き、お話を伺っ

て、ボランティアの在り方について考えるために、参加したのです。

いくつか、私が印象に残っている言葉があります。そこから、ボランティアの在り方について考えてみました。

初めに、『便利さと引き換えに失ったもの』という、佐藤さんのお言葉です。これは、他の参加者にとっても印象的だったようで、当然のことではあるのだけれども、ボランティアによってある地域の何かを変えるときには、きちんと考えなくてはならないことだと思います。ボランティアというのは、ある地域に便利さを提供する行為です。例えば、井戸を掘ることで、人々がきれいな水を手軽に得られるようになります。また、教育を通して地域のごみ問題を解決することで、町がきれいになってスペースが有効に使えたり、病原菌が蔓延しにくくなったりします。日本では当然のように得ている便利さを、さまざまなレベルで提供するのです。しかし一方で、私を含め、日本人は、便利さと引き換えに失ったものがあることを忘れてはなりません。今、私たちは蛇口を開けば綺麗な水を飲むことができますが、その代わりに、山で飲むことのできる、よりおいしい水の味や、その清らかさを知る人は減っているでしょう。日本と他の国では、地理的条件も、文化的背景も異なります。ですから、ボランティアを行う際には、ただ便利さを提供するのではなく、その事業によって得られるものと失うものを天秤にかけて、現地の人がどちらをとるか選ぶべきなのだと感じました。

『結果が良ければ良い。』この言葉は、一見雑なものに感じられるかもしれませんが、私は、これこそボランティアの本質を表したものなのではないかと思います。訓練生のお言葉です。ボランティア参加の動機は、何でもいいのです。それが、現地の人役に立っていれば、現地の人求めているものに答えられていれば、それでいいのです。何よりもボランティアで大切なことは、現地の人助けになることです。一方的な文化や価値観の押し付けでは、当然よくありません。現地に行って、現地の人と話して、何かを提案したり、必要などころに手助けに行ったりする。そのような姿勢が、ボランティアには求められているのではないかと思います。『動機は何であれ、人手は足りないよりあったほうがいい』とおっしゃった訓練生に出会って、私は今まで考えてきたボランティアの意義というものを見出したように感じます。

また、多くの訓練生が、任地での生活への不安を口にする中で、『ボランティア、楽しんでくる』という気軽に前向きな言葉を聞いたときには、少し驚きました。その言葉を聞いて、ボランティアに行く人は、何か形の残るものでなくて、形の残らない何かを得るためにいくのではないかと思いました。それは、さまざまな形の楽しみだったり、充実感だったり、達成感だったりすると思います。JICA ボランティア経験者である田中さんのプレゼンテーションで見た映像で、井戸が出来上がった瞬間を撮影したものがあったのですが、子供たちが新しい井戸に駆け寄るのを見て、その場にいない私まで感動しました。その現場にいた時の感動は、なおさらでしょう。そのような、お金では買うことのできないものを、ボランティアでは得られるのだと思います。だからこそ、ボランティアは『与えてあ

げる』という立場ではなく、『お互いのために』という対等の立場、むしろ、こちらが『いただく』という謙虚な気持ちでいるべきなのだと感じます。今でこそ、GDP や科学技術の進歩度合いによって、先進国、開発途上国（発展途上国）という区別がされていますが、本来、人々の幸せは GDP や科学技術の差で測ることは不可能です。なので、科学技術の進歩によって他国を差別することもしてはならないし、できないと思います。世界中の国が、そういった名称にとらわれがちかもしれませんが、ボランティアこそ、その枠組みにはとられるべきではありません。ボランティアは、時にその理不尽な枠組みを強調してしまうからこそ、より謙虚な気持ちが必要なのではないでしょうか。

### 女子の暮らしの研究所の講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと

最後に、『みんなが手をつけられる温度で活動を広げたい』という、『女子の暮らしの研究所』の日塔さんのお言葉を取り上げたいと思います。このお話を聞いたときに、私は、パリにおける、表現の自由についての論争と、そのときの自分と周囲の人の反応を思い出しました。パリでは、デモが起きました。それは、世界中で、表現の自由について考えられるきっかけになりました。私も、友人とこの問題について話し合いました。しかし一方で、私も、友人も、なんとなく自分とは違う世界の出来事、という感覚があったのは否めません。つまり、パリでのデモは、『表現の自由とは何か』という大きな命題を、強烈なインパクトとともに世界に送り付けたわけですが、それは強烈であるがゆえに親近感がなかったのです。このデモを批判するわけではありませんが、ある問題に対して、より多くの人々が解決に向けて動き出そうとするためには、時に、『みんなが手をつけられる温度』というのは、とても大切なことだと考えます。私は、この温度というのは、いろいろな意見を受容できるような雰囲気があって、活動が明るくて、みんなに身近な存在であるということだと思います。そして、今後ボランティアに求められる姿というのは、このような温度を持つことなのではないか、と考えました。ボランティアは、さまざまな環境で生きている人々と直接接し、直接彼らの力になれる手段のひとつです。なんとなく、ボランティアは特別なことだという認識があるように思いますが、もっと気軽に参加できるものになってほしいと思います。最近では、ボランティアツアーも知られるようになってきていますが、そのように、ボランティアがもっと身近な存在になることも重要なのではないのでしょうか。

### 国際協力や被災地支援ボランティアについて考えたこと

『ボランティア』私は、この言葉には単なるお人よしの意味だけが含まれているとは思いません。もっと多層的で、複雑なものかもしれません。ですが、結局のところ、私が行きついたのは、『人のためになる』という、この実現できるのかどうかわからないフレーズです。だからこそ、『人のため』とは何か、しっかり考えたうえでボランティアをするべきだと思いますし、これから私自身もそのような姿勢でボランティアに参加したいと思って

います。

今回、素晴らしい経験をさせていただきました。JICA 二本松青年海外協力隊訓練所の方々、女子の暮らしの研究所の日塔さん、グローバル協力センターの方々、そしてともに二日を過ごした、お茶の水女子大学、奈良女子大学、宮城学院女子大学の参加者たちに厚く御礼申し上げます。

石川 文絵

お茶の水女子大学生活科学部 2年

### JICA 二本松での講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと

今回の JICA 二本松青年海外協力隊訓練所での研修では、所長、JICA ボランティア経験者、派遣前訓練生とお話をする機会があり、様々な立場や視点を持つ方々の意見を伺うことができたため、非常に有意義な時間を過ごすことができた。そこで JICA 二本松の講義を印象深いと感じた 3つのキーワードから振り返ってみたい。

一つ目は「自助努力促進」である。これは JICA ボランティア経験者の講義の中でウガンダに派遣された田中俊さんが、JICA ボランティアの役割について述べていた際の言葉だ。協力隊員の役割は住民をただ助けることではなく、住民の意識を向上させることや、彼ら自身の自助努力を促し、ボランティアが抜けたあとでもその仕組みが続いていくような状態を作ることであると学んだ。ボランティア活動に対して私が抱いていたイメージは、「奉仕活動」「困っている人を助ける」というものであったため、支援の先にある自助努力促進までは考えが及んでおらず、ボランティアの役割について再考するきっかけとなった。

二つ目は「発展と豊かさ」だ。国が発展するということと国が豊かになるということは同義と捉えがちであるが、人間の豊かさには、数値や指標で捉えきれない価値観や文化も含まれると考えられる。つまり経済発展とは、様々な存在する「豊かさ」の一部であり、経済発展を追求していくことで得られる豊かさがある一方で、失われる豊かさがあるということに気がついた。したがって国や地域ひいては人間の発展について豊かさが用いられる場合は、その文脈と意味に今後留意したく思う。そして開発途上国を支援する際には、支援する側からの支持によるトップダウンの形式ではなく、現地の文化やニーズにあった形での支援を考え、途上国がもつ豊かさを尊重する姿勢が必要である。

三つ目は「価値観の共有」だ。バングラデシュに環境教育隊員として派遣された佐藤さんのお話の中に、ゴミのポイ捨てに関するエピソードがあった。道路にゴミを捨てた人にその理由を問うと、「神様が私の手にゴミを道に捨てろと命じたからだ」という。このことは日本では日常生活においてあまり意識することのない宗教が、バングラデシュでは生活



に密着していることを表しており、異なる文化や価値観に対する理解の難しさを示唆している。異文化は理解できるものだという視点に立つと、理解ができなかった場合に、理解出来ないような文化が悪いということになりかねない。異文化を理解できる・できないではなく、異なる価値観を共有することや違いを前提として受け入れる寛容さが不可欠であるように感じた。

また、訓練生とのディスカッションの際に、ボランティア活動への動機や美德について話が及んだときの議論が印象的であった。ボランティア活動というとその無償性が特徴としてクローズアップされる印象があるが、近年は有償ボランティアの存在も見受けられるため、「無償」ということだけがボランティアの本質を表しているとはいえないだろう。訓練生にお話を伺うと、JICA ボランティアの経験をステップアップや人生における変化の機会と捉えている方がいらっしやった。この点から、ボランティアは自己実現性も兼ねていると考えられ、ボランティアの持つ意味や目的は多様化しているといえるだろう。

### 女子の暮らしの研究所の講演を通じて感じたこと・印象に残ったこと

ご講演くださった日塔さんは私たち学生とも年が近く、また「お洒落」や「可愛い」といった視点から福島の暮らしについて考えるとといった視点が私たちの感覚と身近に感じられ、非常に興味深い内容だった。

日塔さんのように、私自身もデモ行進や女性団体の持つ熱量にはやや疑問を持っていたため、「ぬるく、参加しやすい温度で福島の問題について考えてみる」というアイデアに親近感を抱いた。そもそも原発や放射能に関しては老若男女を問わず考えていくべきトピックであると考えますが、将来子どもを授かる可能性があるという点において、次世代の命へ直接的な影響や責任をもつともいえる若い女性がこのような問題を考えることは他の世代に比べても特に意義深いと感じられる。

女子の暮らしの研究所は「女子」を入り口としながらも彼女たちだけがターゲットなのではなく、「女子」をきっかけとして周囲を巻き込んでいき、しなやかに世界を変えていくという展望があるようだった。お洒落なものや可愛いものに対して情報のアンテナを高く張っている若い女性には、政治問題にしてもボランティアにしてもその特徴をとらえたアプローチが有効でありメディアにも取り上げられやすく話題性も持つように思われる。

### 国際協力や被災地支援ボランティアについて考えたこと

今回の研修において国際協力や被災地支援ボランティアの分野や形態は多様であると気づけたことが大きな収穫であった。中でも自分の好きなことや得意なことから広げてボランティアに繋げていくという視点が新鮮であり、特別な技術や専門分野を持たなくとも社会貢献できるという発見が、国際ボランティアをより身近に感じるきっかけとなった。

また被災地支援ボランティアに関しては、災害発生後の身体的労働を伴う復旧作業以外にも、持続的に被災地を応援するための様々な方法があることを広めていきたいと感じた。

昨年のバングラデシュスタディツアーや一昨年の東日本大震災の被災地ボランティアに行った際に、現地でしか得られない発見や学びがあることに気づいた。その経験より、実際にその土地や住民と個人として繋がっていくことが重要であると感じたことから、今後出来る限り現地へ行き様々な出会いを通して広い視野を獲得していきたい。

### 今後の学習や研究に向けた抱負

来年からの専攻は家族社会学と生活経済学なので、直接国際協力や国際開発に関わる学問領域ではないが専門で学んだことを国際的な分野に応用していきたいと考えている。また、今後もこのような研修やセミナーに参加し、分野横断的な学びに意欲的に取り組んでいきたい。

**野内 瑞生**

**奈良女子大学生活環境学部 2年**

今まで私は、ボランティアや国際交流などに疎く、特に何の活動もしてこなかった。そんな私が、今回この合宿に参加したのは、自分の出身地であり、東日本大震災の被災地である福島県に対して何もできていないという焦燥感からだった。

帰省すると、毎日原発関連のニュースが流れ、東日本大震災の爪跡を強く意識させられる毎日を過ごすのが、福島県から出ると震災前と変わらない日常があり、福島の人々が何を思っているのかはあまり知られていないように感じる。

一度福島県から出たからといって、東日本大震災がなかったかのように私は過ごしていてもいいのだろうか。私にも何かできる事はないのだろうか。でも大学生の私が立ち向かうにはあまりにも大きな問題なのではないか。自分の中でいろいろ考えてみたが、考えるだけで何にもならなかった。今回このような企画があると知って、考えるだけではなく実際に行動に移せる第一歩になるのではないかと考え、このプログラムに参加した。

### JICA 二本松での講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと

このプログラムに参加して一番変化したのは、ボランティアに対するイメージだ。私は、ボランティアは献身的なもので、そこに自分のエゴや考えが含まれてはならないと考えていた。しかし初日の所長さんのお話で、ボランティアはする側に何かしらの満足感やステップアップを与えるものであり、ボランティアする側のためになる側面を持っていいのだと感じた。困っている人が目の前にいて何かせざるを得なくてボランティアをする場合もあると思うが、そうでない場合は、自分のステップアップや満足感のためボランティアをするという側面を持つと思う。所長さんのお話を聞く前は、私は見返りを少しでも求

めてしまうとそれは本当のボランティアではないと思ってためらってしまっていたのだ。

ただ、そうは言うものの、やはりボランティアをするときは、見返りは副次的なもので、現場では相手国や地域のためを思って活動はなされているのだなど、JICA ボランティア経験者や派遣前の訓練生の方々のお話を聞いて感じた。

またボランティアをすることによって、技術的な豊かさを与えることができるが、心の豊かさは奪ってしまう恐れがあるというお話もあった。これは、JICA ボランティア経験者の方の話の中で、開発を進めることによって現地の人々にあった生活を形成できるのなら、開発のための技術を伝えたり、実践することは相手のためになると考えられるが、善かれと思ってより便利に生活できるような技術を伝えるのは心の豊かさを奪う可能性があるとのことだった。確かに今の日本は便利すぎて、便利さを追求しすぎて、たとえばものができる過程や、仕事の辛さと楽しさなどが分からず、心の豊かさが形成されにくいと感じる。便利さには良い面も悪い面もあり表裏一体なのだと思う。

そのため私たちが相手にとって良いと思ってボランティアをしても結果的に相手には良くない可能性があるということになる。これは国際的なボランティアだけではなく、また便利さや技術の問題に限ったことでなく、身近なボランティアの中でも十分起こりうることだと考える。

いわゆる押しつけのボランティアにしないためには、相手の状況、相手がどうしてほしいか、どうすれば相手のためになるのかを深く考えなければならないのだと感じた。これはすごく難しいことだと思う。しかし経験者の方が言っていたように、明確な正解はなく悩みながら実際活動をしながら答えを見つけていくしかないのだと感じた。これから自分がボランティアをするに当たってそれを実感するのだろうと思う。

### 女子の暮らしの研究所の講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと

2日目の女子の暮らしの研究所の方の講演を聞いて感じたのは、女子の暮らしの研究所はよくある復興団体とはまた少し違った団体なのかなということだ。私は、いわゆる復興団体はなにが正解で何が間違いなのかがはっきり分けられていて、また高尚な理念を掲げみんな活動に勤しむ……といったイメージがあった。しかし女子の暮らしの研究所は、わからないことをみんなで学んでいこうというスタンスだったり、何かの目標にむかって激しく活動するのではなくみんなが楽しく参加できる雰囲気、一人の女性、福島県民として自分自身とても興味がわいた。

また福島のこと、復興のことだけではなく、政治などについて考えるラジオや体について知る『\*からだミーティング\*』など色々な活動をしているのを知り、そのようなことも重要だと思った。なぜかというと、代表者の方が仰っていたように、今の世の中で危険なこと、怖いことは、無知であることだと私自身も感じるからだ。今回の原発事故も、原発、行政に対しての関心のなさや無知さがその一端を担ってしまったと私は感じる。また、震災後様々な情報が飛び交い、何が本当なのかわからなくなった時、判断できるほど

の知識を持ち合わせていなかったとも感じる。

自分の身の周りのことなど何事においても、興味を持ち、知っておくことは、私たちがよりよい生活を送るうえで大切であり、不可欠であると私は考える。震災や原発事故について福島県の知人友人とあえては話すことがなく、みんなが震災や原発事故に対してどう思っているのか分からなく、不安に思うことも多かったが、今回の講演を聞いて同じように不安に思っている人たち、震災を機に身の周りの環境への理解を深めようとしている人たちが確実にいることが分かってとても心強く感じた。自分もその一人として、色々なことを学びたいと思ったし、逆に自分が今まで学んできたことなどを還元できたら良いなと思った。

### 今後の学習や研究に向けた抱負

今回のプログラムに参加して、ボランティアをする際の心構え、心持ち、考え方が良い方向に変わったと思う。微力ながら自分にもできる事はあり、自分自身がボランティア活動を楽しんでもいいと分かった。このプログラムをはじめの一步としこれから実際に活動していきたいと思う。

上田 かすみ

宮城学院女子大学学芸学部 1 年

### JICA 二本松での講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと

この二日間で私の国際ボランティアに対するイメージは大きく変わると共に、今まで途上国に行くことに対し不安ばかりを抱いていたことに対し今は、“将来絶対に訪れる。”との決意までを得ることができました。ボランティアってそもそもなぜ行くの？や行ってからどう思った？などの所長さんのお話や訓練生の方たちの思い、一緒に JICA 二本松青年海外協力隊訓練所を訪れた大学生のお話さまざまな人の話を聞き最終的に思ったのは1つ。“人生は一度きりだからやりたいことに挑戦しない理由はない”ということでした。少しでも興味のある事柄について挑戦せずに得るものはもちろん何も無いし、いずれ歳をとってからあとき挑戦しとけば良かったのでは...と思ったとしてもそれはもう後の祭りです。今までの私は、“一人では不安だからやらない。”や、“周りが知らない人ばかりでは不安だ。”など何かと理由をつけて自分の興味のある分野についても避けてきたような気がします。しかしこの二日間は、“やりたいことに挑戦できるのは今しかない”、ということを実感する機会がとても多く、これからの私に大きなものをくれました。またこの訓練所で訓練を受けている方の中には趣味や特技をいかしボランティアに行くという方もいて、文系である私には大きな希望でした。理系学生のように手に職を持っている訳でもない文系学

生の私には何ができるのだろう...と今まで考えていたからです。大学生である今、やらなければいけないこと、やりたいことは山のようにあり、いくら大学生に時間があると言っても足りないと感じます。しかしやらなければ何も始まらないのだという当たり前でありながら難しいことを、JICA 二本松青年海外協力隊訓練所訪問を通して改めて感じることができました。この二日間で最も印象に残った言葉がいくつかあります。1 つ目は、“日本は便利さと引き換えに心の豊かさを失いつつある” というものです。海外ボランティアに話を置き換えれば、何かを教えるということはその国が便利になることと同時に彼らの心の豊かさを奪ってしまうということにつながってしまうのではないのでしょうか。彼らには彼らの今までの暮らしがあり、それらを理解した上で協力していくことが出来れば良いのかなと感じました。2 つ目は“自分が生きているうちに成果がはっきりと見えるとは限らないがとにかくチャレンジするしかない” というものです。成果の見えない物事を継続することは本当に難しいことだと感じます。物事を行うとき成果が見えることで大きな達成感を得ることが出来、その達成感を元に継続していくと私は思っていました。しかし訓練生のこの言葉から、成果が見えることだけがすべてでは無いのだと感じました。この二日間を通し、たくさんの学びと共に自分の将来を見つめ直すことができました。また同じ方向を向いて過ごす仲間がたくさん出会えたことは本当に大きな喜びであると感じます。

#### 女子の暮らしの研究所の講演を通じて感じたこと・印象に残ったこと

私は宮城の生まれであり、東日本大震災が起こった時ももちろん宮城にいました。そのため東日本大震災についてはとても身近にこそ感じていたものの、私の住んでいる場所は海から遠く離れた場所であり、大きな被害ありませんでした。福島原子力発電所と言われても仙台からはとても離れているし、少し他人事として捉えていた自分がいたのだと思います。震災から 4 年がたとうとしている今、先日私は初めて津波の被害を受けた場所を訪れました。宮城に住んでいながら東日本大震災について周りの人よりも全然考えていなかったことを大いに反省しました。女子の暮らしの研究所の方のお話を聞いて、はっとした部分がたくさんありました。“私は近くに住んでいるのに 4 年間も何をしていただろう。” と思いました。日塔さんのお話の中で日塔さんが女川に訪れた際のお話がありました。福島へ一度きてくださいというのに対し、遠いからや時間がないから。これらは本当に言い訳にしかすぎないし、自分の周りさえよければそれで良いという考えなのだと感じました。しかし私もこの人たちと同じだったのだと思います。4 年という時が経て気づいた事実ではありますが、今一度東日本大震災を含め他人事ではなく自分のこととして考えようと思えます。

#### 国際協力や被災地支援ボランティアについて考えたこととこれから

ボランティアに行くことによって得られるものは本当に多くあると感じました。知識を得るだけでなく、達成感、充実感、人とのつながりなどなどです。中でも人とのつながり

というのは一番大きな部分なのではないかと思います。さまざまな年代のさまざまな考えを持つ人と出会うことで自分が成長できるだけでなく、視野が広がり今後の自分の生活に大きな影響をもたらしてくれると私は考えます。被災地支援においては、東日本大震災に関して言えば、震災が起こった時同じ場所にいたからこそ分かることが必ず何かしらあると思います。今後は、今回の学びを踏まえ、やりたいことにどんどん挑戦していこうと思います。今やらなければいけないこととして、自分の専攻分野の学習はもちろんのこと、この1年で自分が避けてきたもの、途中で投げ出してしまったもの、数多く存在します。この二日間は私自身を変えらるとも大きな一歩となりました。ここからどう変わるかは自分次第だと思うので、これから少しずつ努力していこうと思います。

## グループ 2

伊藤詩織（お茶の水女子大学文教育学部 1年）

石神友萌（お茶の水女子大学生生活科学部 2年）

廣田優（奈良女子大学生生活環境学部 2年）

庄司彩友理（宮城学院女子大学学芸学部 1年）

### 伊藤 詩織

お茶の水女子大学文教育学部 1年

#### JICA 二本松での講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと

今回訪問させていただいた訓練施設は、雄大な自然に囲まれ、周囲に家も店も何もない社会から独立した環境下にあり、施設内部も、例えばテレビなど私たちの生活にある余分なもの、娯楽が全て排除され、生活に最低限必要なものしかなかった。そのほかにも宿泊棟の各階には一歩外に出ると必ず誰かがいるという環境に慣れるための集会所があるなど、施設には訓練のための様々な工夫があった。インプットだけの訓練ではなく派遣される途上国の環境を身体的に覚えこませる役割もあり、生半可な気持ちではまず訓練すら終われないと感じた。講義では訓練所所長、派遣を終えた方々のお話を聞くことができた。所長からはおもに協力隊事業についての講義だった。協力隊は単に途上国に対し技術や知識を教えに行くのではなく、日本の知識・技術を現地のライフスタイルに適応させる協働作業をしに行く。先進国が途上国に教える、という構図ではなく、お互いを信頼し尊重し、ともに助け合い学びあう、その win-win な関係こそ協力隊以前にボランティアとしてある

べき姿なのではないか、そして途上国が永続的にその事業を続けていけるようにしていくのはもちろん、協力隊自身も派遣を終えた後の長い人生においてその経験をどのように生かし社会に還元していくか、世界に目を向ける中でそれを忘れてはならない、というボランティアの根本的な意味から問う所長の話がとても心に残った。その後、ウガンダから帰国した田中さんとバングラデシュから帰国した佐藤さんからお話を聞いたが、二人に共通していたのは、挑戦を恐れないことと明るく優しいけど芯の強い人柄だったように思う。やらない後悔よりやって後悔、とおっしゃっていたが、お二人のスライドを見ていて、貴重な経験を手に入れるのもみすみす自分から捨てるのもすべて自分次第であって本当にその通りだなと感じた。また、協力隊というと今までどことなく、意志が強固で熱い思いを持った近寄りたがたい人が多いのでは、などと思っていたが、熱い思いを内に秘めつつとても話やすく明るく魅力ある方々だった。特に佐藤さんの、発展途上国ではなく開発途上国という言葉にこだわる理由のお話が印象深かった。派遣前の訓練生との夕食やディスカッションでは、健康診断と体力測定の結果がみなすぐれていること、意外な応募した理由、気分転換や休日の過ごし方や移動販売についてなど、様々な生の声が聞くことができ有意義な時間になった。また訓練生の人数は多いがみなとても仲良く気さくにコミュニケーションをはかっており、私たちからすると抑圧されたように見える環境下でもみなそれぞれに仲間と協力し楽しみながら過ごしており、その場その状況を悲観的にならずとらえ適応し、楽しみを見つけながら生活していくのも一つ的能力として必要なかもしれないと思った。

### 女子の暮らしの研究所の講演を通じて感じたこと・印象に残ったこと

私は直接被災もしていないし、近くに住んでいるわけでも被災地を訪問したこともない。ニュースや新聞で復興や原発事故の影響を見聞きして、悲惨さや大変さは知っているつもりだった。しかし日塔さんの、震災後の生々しい日々の流れや一つ一つの行動を聞くと、こんな日常誰が想像できるのだろうか、そしてだれもここまで詳細な被災者の日常を知らないはずで、今まで自分は何を見ていたのだろうと呆然とした。心身ともに極限状態で、たくさんの矛盾ややるせないどうしようもない状況に何度も出くわした被災者を私は知らうとしていなかったと感じた。そんな中立ち上がった日塔さんの行動力、そして女子からの視点で、ふつう思いつかないような常識にとらわれない活動を行う女子クラの力は本当にすごいなと心から思った。印象的だったのは、女子クラは特に復興のための町おこしとか活性化とは異なり、「女子」の単なるエンパワメントではなく「女子」を一つのパワーとしてとらえ、男の人も参加できるようにして、おじさんの考えを変えていけるようにしていくのが目標だというお話だった。確かに、震災が一つの契機であって、活動内容は女子の力を使って日々の暮らしそして未来について考えていくもので、復興だけでなくこれからの社会をよりよくするための組織の新たな形の一つとなっていてほしい、と感じた。

石神 友萌

お茶の水女子大学生活科学部 2年

大学間連携イベント「国際協力ボランティアを知ろう」に参加した理由は 2 つありました。1 つめは国際協力の現場で実際に活動している人たちの話を聞きたいと思ったからです。私は 1 年次に Oxfam という国際協力 NGO 団体でインターンをしましたが、そのときは国際協力について政府や企業といった社会における大きなセクターを通じた視点から考えていくことが多かったのです。今回現場で活動している、並びに活動しようとしている方々の話を聞くことによって国際協力の末端の部分も知ることができ、国際協力活動を自分の中でよりはっきりと理解することができるのではないかと思います。2 つめはボランティアについての理解を深めたかったからです。今まで、博物館ボランティアや東日本大震災に関するボランティア団体に所属し活動してきましたが、ふとボランティアの限界や在り方について疑問に思うようにもなりました。このイベントに参加することで自分なりの答えを見つけたいと思いました。

#### JICA 二本松での講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと

JICA 二本松青年海外協力隊訓練所の所長さん、実際に協力隊として現地に行かれた田中さん、佐藤さん、派遣前の訓練生の方々のお話を通じてボランティアの在り方、ボランティアをするにあたって必要なことを理解出来たのではないかと思います。ボランティアをするにあたって私は次に挙げる 2 つの姿勢が大切なのではないかと感じました。1 つめは「してあげる」といった上からの姿勢ではなく現地の人々に寄り添い、共に学び合い現地に貢献していく姿勢であると思います。



JICA 二本松訓練所正面

バングラデシュで活動されていた佐藤さんのお話の中で「道端にごみを捨てたのは自分の意思でなく、神が言ったからだ、とバングラデシュの人が言っていた」というのがありましたが、この話は日本人の価値観から見ればおかしい話であって、力づくでも捨てたと言わせないと、と思います。しかしそれでは国際協力にはならずこれは違うと上から物事を押し付けるのと同じになってしまいます。その土地の文化を尊重し、互いに理想の状態を作り上げていくことが大切なのだ、と感じました。2 つめは学び続ける姿勢です。言語の面はもちろん、現地の人々の生活の根本にあるもの、考え方など現在の状況を作り上げている要因やそれをどう改善すれば良いのかといったことを自分から学んでいかななくてはならないと感じました。



また、講義を通じて心に残った言葉が3つほどあります。「辛さを知ったからこそ感謝の大切さが分かった」「自分が笑えば人も笑顔になる、だから笑顔でいることが大切」「便利さと引き換えに心の豊かさが失われているのではないか」という言葉です。これらのことは人間に普遍に当てはまることだと思います。そのことをボランティアという活動を通じ現地の人々から学ぶことがたくさんあり、そしてそれが現在の生活の教訓となっていることが印象深かったです。



展示室にある各国の旗

### 女子の暮らしの研究所の講演を通じて感じたこと・印象に残ったこと

女子の暮らしの研究所の代表である日塔さんのお話を聞いて、「相手が喜ぶこと」「組織が喜ぶこと」「自分がやっていて楽しいこと」というボランティアの三本柱を深く理解することが出来たと思います。私自身も東日本大震災の被災地である宮城県女川町にボランティアとして行ったことがあります。この活動が本当に自己満足ではなく喜ばれているのか、復興という長い道のりのほんの一部分のみ手伝えることが本当に良いのか、不安に思うこともありました。ですが地元の人たちとの関わりを通じたボランティアはやっていて楽しかったですし、「遠いところからきてくれてありがとう」と喜んでくださったことでやって良かったと思いました。女子の暮らしの研究所の方々の活動も「かわいい」を発信していくなどといった自分たちが活動していて楽しいなと思うこと、そこからふくしまについて知ってもらうことをコンセプトとしていて、今までの「ボランティアってちょっと堅苦しい」というイメージから「ボランティアって互いに笑顔になる活動」というやわらかいイメージに変化した部分もありました。

そして、日塔さんのお話の中で印象に残ったのは震災直後の状況についてのことでした。「避難の途中の栃木あたりで福島ナンバーお断りという看板が掲げられていた」「ネギの値段が福島県産は明らかに低くつけられていた」といった風評被害です。

震災のときも関東圏にいた私はメディアを通してしか被災地の状況は知りませんでした。このようなことが起きていたことを震災から4年経った今知って非常にショックを受けました。改めて震災の事の大きさに気づかされたような気持ちでした。

### 国際協力や被災地支援ボランティアについて考えたこと

このイベントを通じて、国際協力ボランティア・国内ボランティアという2つの種類のボランティアを知ることができましたが技能的に求められるものが違っても、ボランティアをするにあたっての求められる姿勢は同じであるということを感じました。国際協力であれば現地の人々と、被災地支援であれば被災者の人々と対等な立場で双方向的なコミュニケーションを図ることが大切だと感じました。

また、所長さんのお話の中に「成果がくっきりとした形で見えなくてもボランティアをやる意義はある」とありました。ボランティアという立場では確かに大きな成果は見えずらく、一部分だけしか見えない活動に限界もあると思います。けれどもその積み重なりによって大きな成果が達成されるのだ、大きな目標を達成するために一部分でも力にあっているのだ、ということを考えるとこれからもどんな種類のボランティアであれ続けて行きたいと心から思いました。

### 今後の学習や研究に向けた抱負

今後の学習や研究に向けた抱負としては、日本においてボランティア活動と教育の関係性やボランティア活動を振興するための基盤がどうあるべきかについて学んでいけたら良いと思っています。というのも海外ではボランティア教育が義務化されたり、社会の中で当たり前のようにボランティア制度が機能していたりと日本におけるボランティアに対する意識とは違った部分が多々あることを知り興味を持ったからです。

ボランティアをすることで様々な学びや発見があると思います。生涯学習教育の一環としてボランティアが位置づけられても良いのかなと個人的に思ったので以上のことを考えて行くことが今後の私の課題ではないかと思いました。

**廣田 優**

**奈良女子大学生活環境学部 2年**

### JICA 二本松での講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと

私は初めて JICA の青年海外協力隊訓練所を訪れた。以前から青年海外協力隊に興味があったこともあり、青年海外協力隊訓練所での講義内容や生活はパンフレットで読んだので少しは知っていた。しかしながら、パンフレットでただ読んだだけの情報と実際に訪れて見学するというのは全く別物であり、多くの気づきがあった。

青年海外協力隊訓練所に到着すると、まず JICA ボランティア事業について所長から講義があった。この講義の中ではボランティアに必要な要素についての説明があった。自発性、公共性、無償性、自己実現性などの要素である。確かに、ボランティアという英語は、自発的な、自ら進んで、などの意味を持っているので自発性があるからこそ成り立つボランティア行為である。また、独りよがりの迷惑なことをされても意味がないので、その行為によって多くの困っている人々がしっかりと援助を受けられるように公共性も大切である。無償性とは見返りを求めないということだが、何も見返り・報酬がないのに継続的に何かを続けることは困難である。モチベーションも下がるかもしれないし、何より金銭的に困るかもしれない。そこで重要となるのは自己実現性である。自分の好きな事や興味のある

事を活かす活動だったり、自分の能力を発揮したり伸ばしたりできる活動がボランティアになると、モチベーションの維持に繋がる。そして、青年海外協力隊のように現地での生活費が支給されたり、と生活の維持費が確保できるならば、ボランティア活動は継続可能なものになるだろう。だから私は、ボランティア活動は全く無報酬ではなくてもいいのではないかと思うし、少しくらいの手当て等はあったほうが、より質の良い継続的なボランティア活動が出来やすくなるのではないかと考える。

次に、実際に途上国へ青年海外協力隊として派遣されてきた 2 人の体験談を聞く機会があった。私が特に印象に残っているのは、日本人は便利さと引き換えに豊かさを失っているという考えだ。日本人に限らず、世界中の人々が便利さや効率性・利益を追求することにばかり目を向けて、それらの向上に必死に取り組んでいるように感じる。特に日本は、世界の先進国の中でも便利さがトップレベルだと言われている。24 時間営業の店がすぐ近くに、しかも多くの数が存在する。それはお客さんにとっては、いつでも入店・購買が可能で便利なわけだが、そこで深夜に働く従業員は昼夜逆転という人間本来の生活とは正反対の生活を強いられているのである。お客さん確保のためというのは、つまり利益追求のためであって、大量消費社会で起こる現象である。このように現在主流の大量生産・大量消費社会の中では利便性・利益を追求するために、人間の本来の生活は失われつつある。果たして、このような社会を続けていって、地球は保たれるのだろうか。このような社会の在り方をそのまま途上国に押し付けて、利便性ばかりを追求させるような社会にかえてしまっていないのだろうか。そんなことを考えさせられた。

そして、ちょうど派遣前訓練を行っている訓練生達から話を聞くことが出来た。それぞれの人がそれぞれの想いを持って青年海外協力隊に応募したわけだが、誰もが現地で何かをしたくて、人生 1 度しかなのなら今しかない、と感じていた。応募したくても何かに躊躇っているのではなく、とにかくチャレンジしてみようというチャレンジ精神が伝わってきた。やはり、このようにチャレンジ精神が旺盛な人じゃないと途上国での 2 年間の生活はやっていけないのかなと思った。

### 女子の暮らしの研究所の講演を通じて感じたこと・印象に残ったこと

これまで女子の暮らしの研究所という名前を聞いたことはなかった。女子の暮らしの研究所のトップの人がまだ 30 代という若い人だったので驚いたが、その若さゆえに若年女性層に寄り添った活動が可能なのかなと思う。東日本大震災で被災した人は多くいる。そして、その中には乳幼児から高齢者、妊婦、身体障害者、外国人など様々な人が含まれている。しかし、復興計画を進めている政府は中年男性がほとんどで、復興建設に訪れている人もほとんどは男性である。そんな中で忘れさられがちな女性、特に選挙や政治に無関心な人の割合が高いと言われている若年層、そしてまだ法律上、未成年の中学生・高校生に焦点を置いて活動しているのが女子の暮らしの研究所である。原発の放射能の話をつかりやすく説明する説明会や、若年女性をターゲットにした福島の伝統工芸品を使ったピアス

を販売して、日本中の女子がそのピアスをきっかけに福島について知っていくことを目的としている。

東日本大震災が起こってからもうすぐで4年が経とうとしている。まだまだ仮設住宅で生活をせざるを得ない人は多く、思うように復興は進んでいない。福島第一原発の復旧作業もまだまだ中途半端で手つかずのところが多い。そんな中で、日本は政府をはじめ、2020年の東京オリンピック開催や大阪へのカジノ導入に熱を入れ、震災復興を疎かにしているような気がしてならない。多くの人が困難な生活を強いられているのを見過ごして、仮設住宅よりも非常に豪勢なオリンピックの選手宿泊場を建設している場合だろうか。もっと被災者のことを考えたい、忘れたくない、広めたい。そのように考えた。

庄司 彩友理

宮城学院女子大学学芸学部1年

#### JICA 二本松での講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと

訓練所に着いて一番初めに所長の講義を受けました。内容は、ボランティアについてでした。私は、今までボランティアはしたことがあってもそこまで深く考えたことはありませんでした。講義でなぜあなたはボランティアをするのかと聞かれたとき正直戸惑いました。私個人の意見として一番初めに思いついたことは、ボランティアを通じて普段触れ合うことのないような方々とふれあい今までの価値観が変化し自分の視野を広げることができるということです。しかし、ボランティアをした後にはこの活動が本当にその人のためになったのか毎回考えてしまいます。

その後、実際に派遣されていた田中さんと佐藤さんの話を聞きました。田中さんの話の中で私が初めて知ったことは特別な技術がなくても活動出来るということです。私は、今まで特別な資格や技術がなければ派遣されないと思っていました。しかし、当時大学生で新卒採用された田中さんは特別な技術をもっていなかったため、コミュニティ開発という分野で派遣されたと聞きました。現地では、井戸を作ったり、衛生啓発をしていたと聞きました。

佐藤さんはごみ問題を改善する活動をしていたそうです。佐藤さんは、社会人経験を積んでからと聞いたのですが、仕事を辞めて参加するという熱意はすごいと思いました。自分ももしも参加する立場だったら、仕事を辞めて参加するかわかりません。

この二人に限らず、訓練生の話を聞いても本当にどの人も自分の現地での目標や考えがしっかりしておりやはり中途半端な気持ちでは行けないのだなと思いました。

#### 女子の暮らしの研究所の講演を通じて感じたこと・印象に残ったこと

私は、最初研究所と聞いてとても堅苦しい印象を受けていました。しかし、実際に日塔さんの話を聞いて、研究員は良い意味で普通の女の子だという話を聞き、親近感を持ってました。また、日塔さん自身もとても気さくな方でわかりやすくお話をして下さいました。日塔さんの震災の話を通じて、原発や震災で福島がどんな状況だったのかを詳しく学べました。私自身も被災した身として、当時の状況や復興の状況を考えました。また、原発問題や福島のいまを考える活動だけでなく、フェアトレードを知ってもらうイベントをカフェで企画し実施していると聞きました。バレンタイン一揆の映画は私も見たことがあって、仙台でも小規模ですが、実際に一揆を起こしたりしました。

これは私の個人的な話になりますが、来年はもっと大きなバレンタイン一揆を日塔さん達と協力し、してみたいとも思いました。

### グループ 3

木村翠（お茶の水女子大学文教育学部 1 年）

吉村玖瑠美（お茶の水女子大学生活科学部 3 年）

平渡友理（奈良女子大学生活環境学部 2 年）

大友麻衣（宮城学院女子大学学芸学部 2 年）

木村 翠

お茶の水女子大学文教育学部 1 年

#### JICA 二本松での講演を通じて感じたこと・印象に残ったこと

この 2 日を通して私が最も強く感銘を受けたのは、二本松訓練所の訓練生から溢れる明るく前向きなエネルギーでした。1 日目の研修は主に JICA 事業や青年海外協力隊についてで、実際に隊員として活動した方の貴重なお話を聞き、さらに、夕食と夕食後にこれから派遣地に向かう予定の訓練生の姿を直に目にしてお話することができました。これらの活動を通して新たに知ったことは協力隊員の女性の割合が思った以上に高かったことと、協力隊の分野は様々であり、理系文系問わず、技術・資格の有無を問わず参加できるということです。お茶大の五十嵐さんが質問していましたが、文系の私はどのように国際協力の一助となるのかを日頃から疑問に思い考えていたので、今回この点を知ることができて、とても良かったです。また、協力隊員の実際の活動例をお聞きして思ったことは、ボランティア活動には受容力と柔軟性が必要だということです。現地の自分の文化とは異なる慣

習・思考をどのように受け入れていくか、向き合うか、ということはとても切実な問題で、今回はお二人の派遣経験者の例を聞きましたが、二人とも現地語を覚える、現地の人との交流を大切にすることなどの努力を通じて乗り越えてきたことがわかりました。また、そのような活動に必要な資質を訓練所ではしっかり養成されているのだということ、訓練生の生活や語り口からひしひしと感じました。総じて言えるのは、彼らが前向きで、明るくて、他人とコミュニケーションするのに怖じ気づかず、むしろ積極的である、ということです。この研修に参加する前、私はどうして協力隊に参加する前に専用の施設を設けてまで訓練をする必要があるのだろうかという疑問に思っていました、実際の見学を通して、集団生活と規則正しい生活と、しっかりと知識（特に語学）の蓄積があつてこそ、質の高いボランティア活動ができるのだとわかりました。現地での活動を通して、「協力隊員は現地の人々からたくさんものを得て、学びを深められるんだよ」というお話がありましたが、私も、そのような彼らの姿からたくさんものを得られ、勇気をもらうことができました。

### 女子の暮らしの研究所の講演を通じて感じたこと・印象に残ったこと

私はこの講演を受ける前に、この会社の Facebook を閲覧したのですが、多様な活動をしていて、発信の方法も様々で、とても面白い企業だなという印象を持っていました。また、研修のしおりには「福島県で復興に取り組む社会企業『女子の暮らし』講演」と書かれていたので、復興に必要なことについて聞けるのだと思っていました。しかし、その事前のイメージはいい意味で裏切られました。この会社を起業したのは福島県の方で、自分の被災の経験から必要なものを自分で感じとって、自分なりの方法で誰かに伝えよう、という意志を強く感じました。「かわいい」を軸に女子の視点から情報を発信していくぶれない姿勢がすごく伝わり、決して「復興」が彼女らの活動のメインテーマではないのだと思いました。復興していこう！がんばろう！という押し付けがましいものではなく、日常の中で被災者やそうでない人にまでも彼女らの活動がそっと寄り添うような活動だな、という印象を受けました。「復興」のための活動のイメージが以前と変わった、とても充実した時間でした。

### 国際協力や被災地支援ボランティアについて考えたこと

これまで大学で国際協力に興味を持って、講義を受けたり自分なりに調べたりしていましたが、実際の活動や人を知ることは、講義や本、インターネットからはわからない部分を知ることができるのだと強く感じました。国際協力と被災地支援ボランティアに共通して必要なことは、相手が何を必要としているのか、そしてそれを自分がどうすれば相手とともにその欲求を満たしていくことができるのか、ということだと思います。それは、決して簡単なことではありませんが、自分次第で様々なアプローチができるということを感じた研修でした。そのように考えながら自分が活動したなら、きっと、私が以前東北でホテルの清掃作業をしたときに感じた「これで彼らの助けになったのだろうか」というも

やもやは少しでもなくなり、双方にとってよい活動になるのだろうと思いました。

### 今後の学習や研究に向けた抱負

今回の研修を終えて、私は短くてもいいので実際に国際協力やボランティア活動を行ってみたいと思いました。なぜなら、自分が実際に体験することで、また新たな発見ができると感じたからです。これから、特に国際協力の分野に関しては語学力が重要であることから、日頃から語学の学習を、特にコミュニケーションをとる分野を大事にしたいと思いました。この春休み、早速オーストラリアに短期留学に行くので、実践していく予定です。また、オーストラリアは多文化主義を現在はとっていて、多様なエスニシティを持つ国なので、異文化交流・異文化理解についても学習しようと思っています。

最後に、今回の2日間の研修は、2日間とは思えないほど内容の濃い充実した時間でした。参加することができて本当に良かったです。企画してくださったグローバル協力センターの先生方、また、受け入れてくださった JICA 二本松訓練所の皆さん、ありがとうございます。そして、訓練所の食事は非常においしかったです！この貴重な経験をこれから生かしていこうと思います。

吉村 玖瑠美

お茶の水女子大学生活科学部 3年

### JICA 二本松での講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと

#### ・所長の言葉

所長の“ボランティア活動は全体の一部に過ぎない”という言葉が印象に残った。今まで、成果を得られなければ、ボランティアとは呼べず自己満足にすぎないのではないかと感じていた。しかし、ボランティアはすぐに成果を得られるようなものではないこと、長い目でみて支援を続けていくことが大切であるということがわかった。ボランティア活動は、循環していると感じられた。現地で協力隊として活躍していた人が帰国してから自分の周りの人々に自らの経験を伝えることで国際的な問題に関心を持つ人を増やすことも可能である。その関心をもった人が支援を続けるきっかけとなる行動を起こすこともあるだろう。このように自らのボランティア活動は、目に見えた成果が得られなかったとしてもどこかで社会に還元されていると考えられる。

#### ・訓練生との交流

食堂や朝の集いでまわりを見渡してみると、女性の訓練生が多くいることに気がついた。女性は体力的に途上国へ2年いくのは大変なのではないかと漠然と思っていたため、非常

に驚いた。バングラデシュへ派遣された佐藤さんからは、男性にはない力強さをとても感じた。女であるがゆえに協力隊として国際ボランティアへいくことを躊躇っていたため、このように女性で活躍されている人の話を聞き、自分も決して不可能ではないと考えるようになった。また、自分の過去の専攻や職業とはあまり関係のない分野で派遣される人が多くいることがわかった。私は理系であり専門的な知識を身につけることができるため、文系の人よりもボランティアではやりやすいのではないかと思ってしまうが、必ずしもそういうわけではないことに気がついた。ボランティアにおいては、どのようなことに対してでも柔軟に対応できることが大切である。もっと幅広い視点で物事をみられるように努力していきたい。“不安よりも楽しみだという気持ちの方が大きい”、“ものすごく特別な思いがあって応募したわけではないが、ただやってみたいという気持ちに従って志望した。後悔はしたくなかった”という訓練生の言葉が印象に残った。最近国際的に注目された物騒な事件があり訓練生は不安が大きいのではないかと思っていたため、“楽しみだという気持ちの方が強い”という言葉は意外に感じられた。私自身も後悔しないように、やりたいことを見据えながら残りの大学生活を積極的に行動していきたいと考えている。

・朝の集いについて

“途上国の人々は国旗に対して敬意を払っている”と聞き、今まで自分は自国や相手国の国旗を意識したことがほとんどないことに気がついた。言語や文化だけではなく、国旗を学ぶことも相手の国を理解することに繋がるのではないだろうか。ただマスコミの情報を受け取ってその国の勝手なイメージを作り上げるのではなく、自分で積極的に異文化交流をして文化を学んでいかなければならないと感じた。



写真1 “言語学習室の廊下にて”

教室内では派遣先の国の言語で話さなければならない。訓練期間中でゼロ状態から日常会話レベルには達するそうだ。訓練生は毎日必死で言語の学習をしている。言語学習の占める割合は6割だそうだ。

### 女子の暮らしの研究所の講演を通じて感じたこと・印象に残ったこと

どこにでもいるようなごく普通の若い人が、震災を通じて自分の考え方を改めて自ら積極的に行動しているところに感銘を受けた。“何も知らなかった自分が悪い”という考えに改めることは、お上任せの傾向のある日本人にとっては難しいことだと感じた。国や役所など環境のせいにするのは簡単であるが、自らの甘さに向き合い行動を起こしていく人はほとんどいないだろう。また“ラディカルな活動にはならないようにしている”という



ところが印象に残った。たとえば、“〇〇産のものを食べなさい or 食べるのはやめなさい”という風に言うのではなく、食材を自身で選択するようになることが震災のことを多面的に考えるきっかけになると感じた。震災後にラディカルな活動を街のいろいろなところでみかけるようになったが、そのような活動に何となく煽られて賛同するのではなく、一度自分で納得のいくまで調べたり考えたりすることが大切だと思った。

### 国際協力や被災地支援ボランティアについて考えたこと

以前、授業で国際協力がうまくいっていない例をみて、国際協力は本当に途上国のためになっているのかどうかと疑問を抱いていた。それは、タイに日本製の浄水場ができていたものの全く稼働されていない、すなわち日本の高い技術のみが途上国にもたらされただけで、その国に合った支援や人材の育成が全くできていないというものだった。そのため、JICA 二本松を訪れる前は、ボランティアをするならば何らかの成果を必ず得なければならぬと感じていた。相手のためになるような結果を得ることができなければ、ボランティアとは言えず、援助をする側の単なる自己満足にすぎないと考えていた。国際協力や被災地支援は数年という短期間では目に見えた大きな成果を得ることは難しい。戦後の日本は驚くべきスピードで発展したため、我々は途上国や被災地に対しても同じようなスピードで復興するのではないかと思う傾向がある。しかし、環境問題や文化的な背景などが支援を妨げることもあり、一筋縄でいかないことがほとんどである。そのため、支援を何十年または何百年という単位でみて何世代にも渡って支援を続けることが大切であることに気がついた。また、実際に現地へ行き支援をしてから、みえてくるものも大いにあるのではないかと考えるようになった。日本の高い技術をそのまま途上国に適用することが必ずしも役に立つわけではなく、その途上国に合った技術を模索していくことが大切なのだと感じた。



写真 2 個室

1人1部屋与えられている。23時消灯、6時15分起床である。食事の時間等も決められており、規則正しい生活を送る。異性が隣同士の部屋になることもある。

### 今後の学習や研究に向けた抱負

私の専攻は環境工学で、水をテーマに研究する予定である。環境衛生の改善は途上国の発展に欠かせないと考えている。日本の水技術は世界的に非常に高いが、それを途上国に

応用することは経済的または地理的に難しいこともある。そのようなことを考慮した上で途上国それぞれのニーズに合わせ、環境衛生を改善できるような研究をしていきたいと考えている。大学院に進学後は積極的に実地調査をしに途上国へ訪れたい。また、これからも色々な国の人と接したり、国際協力分野で活躍している人と交流をしたりしていきながら自分のキャリアについて考えていきたい。



写真3 エントランスロビー

約70日間の訓練所生活を行う。健康管理についてはとても厳しいそうだ。外に出られる日は決まっている。13日は出張販売の日であり、文房具などが売られていた。

## 平渡 友理

### 奈良女子大学生生活環境学部 2年

私は海外で働くこと、海外に自分の技術を生かしていくことに興味があり、今回の視察に参加いたしました。しかし、興味はあったものの、国際協力についての知識はほとんどありませんでした。

今回の講義、体験の中で聞いた言葉の中で、特に印象的だった言葉があります。それは、「日本は便利さと引き換えに心の豊かさを失った」「時間は待つてはくれない。時間が経つほど、選択肢が奪われていく」「知らないと選択もできない」「感性が豊かなうちにいろいろな経験をしよう」の4つです。

先日恋人と別れる時も、ラインで「さようなら」を言い合った私。直接顔を合わさないコミュニケーションが当たり前の今の日本。便利ではあるけれども、心の幸せからは遠ざかっているような気がします。「開発途上国に行つて、心は日本人のほうが開発途上なのではないかと思った」という佐藤元隊員のお話が忘れられません。

また、協力隊員の方々と接する中で印象的だったことがあります。それは、みなさんいきいきとしており、普通の人よりもとても輝いているように見えるということです。自分の人生を自分の意志でしっかりと歩いている人特有の、非常に良い雰囲気がありました。

また、女子の暮らしの研究所の方のお話も、とても興味深いものでした。被災地での女性起業家さんということで、さまざまなことを考えながら、自分たちのできることから少しずつ歩みを進めている姿に、とても感銘を受けました。若い世代が買いにくい伝統工芸品を、可愛いアクセサリにすることで広めていくなんで、素晴らしいアイデアだな、と思いました。

今回の視察で出会った方々は、学生も含め、どの人も、アクティブで、自分の生きたい人生を歩んでいこうとしている方々ばかりでした。どの人からも、とても良い刺激を与えられました。

私は現在建築の勉強をしています。将来は、まずはしっかりと自分の技術を身に付け、高めたいので、日本に限らず、開発途上国にも積極的に自分の技術を生かしていきたいと考えています。

人生は1度きり。やりたいことには臆せずどんどん積極的にチャレンジしていきたい。「人生に悔いは残さない」生き方をしていきたい。そう、固く自分の心に誓って、JICA 二本松を後にしました。このような機会を与えてくださった、お茶の水女子大学、奈良女子大学、JICA 二本松の皆さんに、心から感謝いたします。

大友 麻衣

宮城学院女子大学学芸学部 2年

### JICA 二本松での講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと

講義を通して感じたことはたくさんある。その中でも最も印象に残ったことは、バン格拉デシュに派遣された佐藤真奈さんが話していた「便利さとひきかえに失ったものは心の豊かさ」という言葉だ。日本にいる時はメールやLINEなどのSNSは日本のどこに行っても連絡手段の一つとして有効に使われている。しかし、バン格拉デシュや途上国に行けばSNSを連絡手段として利用する場合もあるかもしれないが、直接相手に会って用件伝えることの方が多い。そのため、日本に比べると直接相手に会ってコミュニケーションをとることが多い。相手の表情を見てコミュニケーションをとることで、そして相手の笑顔を見ることでどれだけ心が喜ぶだろうか。どれだけ心が豊かになるだろうか。きっと私たちの日本の生活では便利になりすぎてしまい相手に直接会う、話す、そして直接コミュニケーションをとることで心が豊かになるということを忘れてしまっているのかもしれない、と気づかされた言葉だった。

二つ目は同じく佐藤さんが話していた「日本こそ発展途上国なのではないのだろうか」

という言葉だ。日本は先進国に位置づけられているが、世界でも上位に入るほど自殺大国であり、年間の自殺者数は約3万人近くである。自殺の原因として「健康問題」や「経済、生活問題」などが挙げられる。反対に途上国では日本と比較すると自殺者がはるかに低い。途上国は日本よりも生活水準も低く、経済状況も日本より豊かではない。健康問題も経済、生活問題も途上国の方が問題を抱えている。それなのになぜ日本の自殺者は多いのだろうか。“人が死ぬ”これほどもったいないことがあるだろうか。佐藤さんの言葉で途上国について改めて考えることができた。

三つ目は、ウガンダに派遣された田中俊さんのモットーである「やらないで後悔するよりもやって後悔しよう」という言葉だ。田中さんは大学を卒業してすぐにウガンダに派遣された。青年海外協力隊のほとんどの隊員は社会経験をしてから派遣される場合が多く、新卒で派遣されるのは珍しいそうだ。田中さんは社会経験が云々というよりも、自分が“今”行きたいから行ったのだと熱い思いを話してくださった。一度きりしかない自分の人生は、あつという間で、行きたいと思っても、いつ行けるかなんて分からない。そうであれば自分が行きたいと思ったときに行けば良いのだとある意味プラスに考えることができた。

また、二人の講義を聞いて、ボランティアとは「与えるのではなく、ともに学ぶ姿勢が大切」ということを特に感じた。私は“ボランティア”という言葉が大嫌いだった。ボランティアをする側は“やってあげる”という上の立場で、される側は下の立場で“可哀想”とか“何か足りない”イメージが強く、お互いの関係が対等ではないからだ。しかし、お互いが共に学ぶ姿勢があることで何か吸収できるものはきっとあるはずだ。少なくともボランティアをする側は何かを与えるだけではなく、学ぼうとする姿勢が大切なのではないだろうか。そして青年海外協力隊として活動していくうえで、何か上手くいかないことがあったとしても、多様な価値観を共有し、成果が見えないことに対して悲観的になりすぎないことが重要であると感じた。実際に協力隊として活動した二人の講義の中で「やりたくてもできなくなる前に“やってみよう”と思ったら行動してみること」「時間は待ってくれない、時は重ねるほど選択肢は奪われる」という言葉が何をしたいか分からず、うじうじしている自分にはとても響いた。

### 女子の暮らしの研究所の講演を通じて感じたこと・印象に残ったこと

女子の暮らしの研究所の代表をしている日塔さんは、東日本大震災の時に郡山市にいて、震災を経験したうちの一人である。日塔さんは原発事故により自主避難を選択した。日塔さんの講演で最も印象に残っていることは「福島県に対する差別」だ。自主避難を選択した日塔さんは福島県から離れ東京方面を目指していた。車で東京へ向かっている途中にある出来事があった。それは「福島ナンバーお断り」の一言があったそうだ。それだけではなく、日塔さんがスーパーに行った時にネギを買おうと思い値段を見てみると、福島県産のネギは5本で100円、他県のはネギ2.3本で250円相当したそうだ。これはあきらかに福島県への差別である。店頭で売られているものは放射能の基準値を下回る安全なも

のなのになぜこのような差別が生まれるのだろうか。原発事故は震災という自然災害がもたらしたもので誰が悪いわけでもない。それなのに福島県の人々は原発により強制避難、自主避難を余儀なくされている。避難をすると避難先では「福島」と聞くだけで差別をされる。私も東日本大震災の津波の影響により家を流されているので、被災者の気持ちはよくわかる。しかし、もし私が福島県民であれば「悲しい」気持ちもちろんあるが、それより「悔しい」気持ちの方が勝るだろう。「なんで福島だけが差別されなければいけないのか」と。日塔さんの言葉は福島県民みんなが思っている心の叫びだろうと思った。

### 国際協力ボランティアについて考えたこと

今回 2 日間を通して感じたことはたくさんあった。まずは青年海外協力隊に対するイメージが来る前と実際に来てみてでは全く違うということ。来る前は青年海外協力隊は昔から絶対なりたいたいと思っている人たちがほとんどだろうと思っていたが、実際は、協力隊に興味はなかったが、結婚する前に人生の一コマとして行きたいという人もいれば、大学を 2 年間休学して行くという人もいた。大学を 2 年間休学する人は「僕は 2 年間休学し、帰国してから大学に通うので合計 7 年間大学に通うことになる」と誇りをもって話していた。また、「JICA ボランティアとは？」という質問に対し、「人生のギャンブルだ」と答えている人もいて感銘を受けた。みんないろいろな思いで協力隊に参加しているが、共通している熱い思いはあった。

### 今後の学習や研究に向けた抱負

私は将来やりたいことが多く、何をやりたいのか分からない状態でこの企画に参加した。参加する前に「このイベントに期待することは？」という質問に対し、私は「イベント終了時自分の将来のビジョンが描けるようになりたい」と答えた。実際にこの企画に参加し、たくさんの人と真剣に話したことで、まず自分が何をしなければいけないのかイメージすることができた。インプットよりもアウトプットを意識して、これから一步を踏みだしていきたいと思う。

## グループ 4

杉山佳奈子（お茶の水女子大学文教育学部 1 年）

フオン・ティ・タイン（お茶の水女子大学文教育学部交換留学生）

二宮愛（奈良女子大学文学部 3 年）

岡田優紀（宮城学院女子大学学芸学部 2 年）

### 杉山 佳奈子

#### お茶の水女子大学文教育学部 1 年

私が今回このイベントに参加したのは、自分の視野を広げたいと考えたからである。大学に入学して1年経った今、自分は知らないことばかりで視野が狭いと感じていた。正直に言えば国際協力に興味があったわけではなく、海外経験もボランティア経験もなかったため、周りの参加者との温度差はあっただろう。周りは留学経験やボランティア経験があったり、この先も国際協力に携わっていこうと考えていたりする方が多く、私は場違いなのではないかと考えていた。

またボランティアというと、難しくて崇高なことというイメージが強すぎて、何か専門的な知識を持っているわけでもなく、社会経験もない私のような者では何も出来ないのではないかと、むしろ邪魔をしてしまうのではないかと、そんなことを思っていた。

ゆえに今回のイベントに参加するにあたって私の目標は①視野を広げる。一つでも多く知らないことを知る。②知識や経験のない私でも何か出来ることがあるのか知る。の二点であった。ただの知識としてではなく、実際に行ったからこそ分かる感覚や経験として得られたら、というように考え今回のイベントに参加した。

#### JICA 二本松での講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと

初めにお話してくださったのは、この訓練所の所長でいらっしゃる北野所長。青年海外協力隊やこの訓練所の概要、ボランティアスピリットについてなどをお話してくださった。ボランティアには3つの要素がある。無償性・自発性・公益性の3つである。しかし会社や学校などの所属団体から強制されて行うこともボランティアと表現されるなどこの要素はもう少し幅広く解釈できるものだそうだ。また、無償性に関しても感謝や満足感が得られる、とのお話であった。この点で私は少し驚いた。無償性や公益性は絶対的に守られなければならない、もっと言えば自己犠牲というようなほど「相手のため」でなくてはならない、と考えていたため「自分のためになる」という側面は確かに存在しつつも、公によしとはされないような気がしていたのである。しかし多くの青年海外協力隊参加者は帰国後、「教えることより学ぶことが多かった。」と語り、自らの今後の生活に還元していくそ

うだ。

コミュニティ開発（当時は村落開発）部門としてウガンダに行った田中俊さんは、水道が整備されていない村において水の防衛隊として井戸の修繕、また手洗いの啓発などに尽力なさったそうだ。田中さんは大学では国際関係について学んでいたそうで井戸などの水の整備に関する専門知識は全くなかったが、訓練期間中に学んだり現地の技術者の力を借りたりすることで事業に取り組んだとのことであった。田中さんは大学を卒業すると同時にこの活動に参加し、帰国後は公務員として働かれるそうである。もちろん幅広い知識を持っていらっしやっただと思うが、ご本人は「資格や知識不足を熱意だけで補った」とおっしゃっていたことが印象的である。初めに書いたように私には専門知識も経験もないが熱意があれば他の方の手を借りるなどして国際協力に携わることも可能であると知ることができた。

環境開発部門としてバングラデシュでゴミ問題解決へと尽力なさった佐藤真奈さんのお話で私が気になったのは佐藤さんが「発展途上国」と「開発途上国」を使い分けていらした点である。「発展」という言葉は曖昧で、ともすれば先進国の価値観を押し付け、現地の生活を蔑ろにすることになりうる。そうなれば心理的な豊かさを失わせてしまう危険性もある。ボランティアは善意の行為、それは紛れもない事実だと思うが、現地の人にとっての良さや本当に必要なことを見極め提供していく必要性について私も考えていこうと思うきっかけとなった。

数人の訓練生の方々とお話しさせていただく機会があったが、特に興味深いお話をして下さったのは日本語教育部門でモンゴルに派遣される方と、野球部門でガーナに派遣される方である。お二人とも元々国際協力に興味があったわけでもなく、ガーナに行かれる方は海外に行くことさえ初めてだそうだ。お二人のお話に共通していると感じたのは「自分に出来ることは何か」を考え、また「自分の成長になることは何か」という点も重視していらっしやっただことである。そしてそれが現地のためにもなればいい、というような考え方である。

この考え方は私にとっては革新的なものであった。なぜならそれ以前の私は、現地から求められることをするのこそがボランティアであり、自分のしたいことを重視していいという視点はなかったからである。自己成長もあくまで副産物的なものでありこんなに重視していいとは思っていなかった。人によってはこんな考え方を不正であると言うかもしれない。しかし私はこのお話により、本人が楽しむことや意欲的に取り組めるということもボランティアの一側面として大切だと認識した。

### 女子の暮らしの研究所の講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと

女子の暮らしの研究所は東日本大震災後、原発問題などで苦勞する福島において女子の暮らしを応援しようという考えのもと設立され、情報発信や諸々のイベントを通して被災

地の女性を支援している団体である。日塔さんが震災当時感じたのは「自分が何も知らない、知らされていないこと」であったという。特に原発事故に関しては多くの情報が入り乱れ、何が正しいのか分からない状況にあった。それゆえどんな行動をとるべきなのかもわからなかったそうだ。そのことから日塔さんは震災後この団体を設立し、自ら情報を集め、学び、仲間と共有し、多くの人々へ発信していらっしゃる。

日塔さんは「カワイイ」がお好きである。可愛いからという理由で福島をあえてひらがなで「ふくしま」と表記するなどの拘りもある。「カワイイ」をきっかけに福島を発信していこうというコンセプトのもと「FUKUSHIMA PIECE プロジェクト」としてアクセサリーの製作・販売もしていらっしゃる。これは一見くだらないことのようにであるが、多くの人に身近に感じてほしいという思いであったり、自分たち自身も楽しく活動していけるようにという思いであったり、多くの想いが感じられるものである。

### 今後の学習や研究に向けた抱負

北野所長のお話で最も重要だと感じたのは「多様な価値観の共有」という点である。北野所長はこれを現地の人々との関わり方において重要だとおっしゃった。青年海外協力隊として派遣された人は、現地の技術向上や経済・福祉発展のために行っている。そのために良かれと思ってすることでも現地の人々の習慣や宗教観などからずれてしまうことがある。そういうときどんなに良いことでも現地の人々の想いは蔑ろにされてはならず、彼らの価値観を共有・尊重すべきなのである。私はこれが、国際協力全般に対して言えることなのではないかと、お話を伺いながら考えた。専門性を生かし、現地の人々のために自己犠牲的にすることだけが国際協力ではない。自己成長であったり、自分の好きなこと・できることを何らかの形で活かしたいという思いであったり。そういった多様性が認められるべきであろう。

講演や交流で出会った多くの方に共通して感じたのは「自分にできること」「自分がやりたいこと」そして「自分が楽しむこと」で「周りのためにもなること」という考えのもとに行動していることである。北野所長のお話のようにボランティアは私が思っていたよりずっと多様で自由である。「私だったら・・・」と自分のもとへ活動を引き寄せること、その大切さを深く感じた二日間であった。

私は以前からメディア、特に出版に興味がある。日塔さんのお話の通り「知らないこと」は怖い。情報発信は確実に力になる。また「楽しむ」という視点から絵本や漫画のような娯楽も、気分を盛り上げるという点でときには力になる。私は、実際に国外の現地に赴いて活動する方に情報を届けたり、日本国内でこの活動を広めたり、前線から一步引いたところから情報発信という形で国際協力へ携わっていきたい。それが私のやりたいことで、私にできることである。



## フオン・ティ・ティン

### お茶の水女子大学文教育学部交換留学生

皆さん、こんにちは！ベトナムから来たティンと申します。今回お茶の水女子大学が開催した『国際協力ボランティア』プログラムに参加する機会を頂いて、日本にいる間、非常に貴重な体験になりました。

母国ではもう三年生になりました。高校生の時、大学に入ったら社会を尽くすため、是非色々なボランティア活動に参加したいと思っていますが、結局3年間が経って、なかなか実現できなかったです。最初はボランティアに詳しいのがゼロだったということでボランティア活動、特に国際協力ボランティア活動についてもっと理解したいというきっかけで、このプログラムに申し込みました。そして、福島県にある二本松青年海外協力隊訓練所における1泊2日の見学は自分に忘れられない思い出を持たしました。

ボランティアとは何でしょう？この問題に対して、以前に自分のイメージの中にただ『Make people smile』ということでした。しかし、その意味にとどまらず、本当のボランティア活動、特にJICAボランティア事業とはよりよい明日を世界の人々と共有すること、友好親善・相互理解の深化、ボランティアの経験者にも自分の認識を成長させることなどの意味も持っています。北野一人所長の講座を通して、そういうことが分かりました。

そして、最も印象が強く残したのはJICAボランティア経験者のお二人によるお話です。ウガンダとバングラデシュのストーリーに耳を傾けながら、自分自身の知識の中にも様々な変わりができました。発展途上国であるベトナムから来た私はウガンダとバングラデシュの写真とビデオを見て、まるで自分の国のイメージが重なっているような感じが出てきました。省みると、確かにベトナムの現在には田舎で教育を受けられない小民族の子供たちが多く、ごみ処理がまだできないため、環境に非常に大変なこと、さらに2000年間ぐらいの歴史の中、ほぼ19世紀以上戦争を経過していたベトナムは国の建設業の間、多様な問題や障害が生じることなどが分かりました。さらに、日本人が世界中の貧しい国を向っている姿を実際に見て、発展途上国から来た人の立場では、本当に感動しました。心の中にも、帰国後は是非国のため力を出したいという気持ちが出てきました。

特に、今回のプログラムに参加して、サプライズのことを頂きました。それはベトナムへ派遣される訓練生に会いました。日本に来てから、ずっとベトナム国に関心のある日本人の方を探してきたのですが、会いませんでした。それで、ベトナム語で話したり、交流したりできることで、本当に嬉しく思いました。

それに、とても大切にしたいことは各大学からの学生と友達を作れたことです。皆は優しく、色々しゃべってくれました。グループ・ミーティングの時、メンバーの間に自分の考え方を交換できて、とても勉強になりました。

最後になりますが、心より誠に有難うの言葉を申し上げます。

二宮 愛

奈良女子大学文学部 3 年

### JICA 二本松での講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと

JICA 二本松での講義を通して常に感じていたのは、国際協力やボランティアというものの多様性である。まず、衝撃的だったのは動機が多様性だ。最も印象的だったのが、ガーナに野球を教えに行く訓練生の方の話だ。彼は自己成長の手段として、青年海外協力隊に応募し合格したと言う。自分の特技の野球を活かしつつ、それが派遣国の人の役に立てばいい、というスタンスである。他にも、何かに挑戦してみたかったから、他の仕事で日本語教育に興味が出たため、という方もいた。もちろん、国際支援に興味があってという方もあったが、私がお話を伺った方の中では少数だったように感じる。

私は、青年海外協力隊というと、元々海外ボランティアに興味を持っていて、そしてそれに自分を尽くそうとする方が基本的に応募するのだと思っていた。しかし、2 日間経験者の方や訓練者の方にお話を伺ううちに、自分の考えの狭さに気づかされた。もちろん、相手のために何かすることは大切だ。だが、そのために自分が苦しい思いをしなくてはならないわけではない。現地の人への不利益にならない範囲で、自分が見返りをもらおうとするのは別におかしいことではないのである。ボランティアは無償の行為と強く思い込んでいた私は、目から鱗が落ちる思いであった。

また、行動のかたちも非常に幅広い。国際支援とは、青年海外協力隊のように現地で行うものかと思うがちだ。しかし、技術を学びに日本を訪れる人の交通の手配をする、日本で行われている国際ボランティアに参加する、一般のものではなくフェアトレードの商品を買う、これらもまた国際協力のあり方の例である。

動機や活動方法が多様であれば、その後の進路にも広がりがあるものだ。青年海外協力隊を経験された方の進路は、国連職員を目指す方もいれば、公務員になる方、JICA や NPO 法人の職員になる方、家庭に入る方、様々である。私は青年海外協力隊には国際協力に捧げているような方がほとんどだと思っていたため、ここでもまた衝撃を受けた。

### 女子の暮らしの研究所の講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと

女子の暮らしの研究所の講演からもいろいろな女の人の活動のあり方を知ることができた。「かわいく、楽しく、ぬるく、誰でも触れられる温度で」というのがコンセプトだと日塔さんが言っていた。

「ぬるく」意外な言葉である。一般には、温度のこと以外では、軟弱や熱心でない、という意味で使われるが、ここでは、「気軽さ」を表している。私にはなかった発想だ。この手の活動は、情熱や勢いが大事なのだと思っていた。しかし、女子の暮らしの研究所が目指しているのは、コンセプトからも分かるように、そういう活動ではない。日塔さんは、女性活動家として紹介されても困る、と言っていた。

女の人が女の人として何か企画を立ちあげるとき、女性の権利を強く主張するものか、世間に受け入れられるよう男性の目線を意識したものになりがちだと私は思っていた。そのため、この活動は非常に新鮮で、女の人々の活動の新しいあり方を見せてくれたように感じる。いわゆる女性活動家のような情熱的な活動や、男の人目線で作られたダサピンクのような勘違いとは違う。「福島」の表記ひとつにもこだわって、どんな人でも手をつけられる温度にする、重く気負わない活動。国際協力を考える上でも参考になる視点だと思う。

### 国際協力や被災地支援ボランティアについて考えたこと・今後の学習や研究に向けた抱負

国際協力・ボランティアという言葉には、そのつもりはなくても、滅私利他のおいさを感じてしまう。高校生の時、ボランティア活動に参加する部活に所属していた。地域のイベントのスタッフとして参加し、雑用をすることが多かった。自分が役に立っているのはもちろん嬉しかったが、自分がしたことのない色々なことに挑戦させてもらえるのがすごく楽しかった。それと同時に、ボランティア活動なのにこんなに普通に楽しんでいいのだろうか、という小さな不安を常に抱えていた。

今回の講義で、高校生のときからずっと抱えていたもやもやが解消された。ボランティアは楽しんで良い。もちろん、すべきことはしなくてはならないが、その上で、自分も楽しみながら取り組むというボランティアのあり方があっても良い。気負うことなくボランティアに参加して良いのである。思えば、二本松訓練所の方々は非常に朗らかであった。いろいろな方がいたが、皆考え方や視点が柔軟で、凝り固まったところがあまりないように感じた。

そして、自分もそんな風に国際協力やボランティアに取り組めるようになりたいと思う。自分の利益を顧みず相手に尽くすようなやり方ではなく、楽しみながら相手の役に立つ方法で。青年海外協力隊には非常に憧れるが、まだまだレベルが高い。それは先の目標にして、まずは学校の掲示板に貼ってあるような身近なボランティアから挑戦してみたい。

岡田 優紀

宮城学院女子大学学芸学部 2年

### JICA 二本松での講義を通して感じたこと・印象に残ったこと

私はこの二日間で様々なことを考え、体験することができたと感じています。その中でも私の中で特に印象に残っていることは、青年海外協力隊のOVの方々のお話と派遣前の訓練生との交流の2つです。実際にボランティア活動を体験されたOVの方々のお話はとても興味深く、勉強になることが沢山ありました。

田中さんのお話の中では、『一歩先へ踏み出してみる』ということが大切だと感じました。

田中さんが、青年海外協力隊に応募したきっかけは、「やらないで後悔するより、やって後悔しよう」という思いからだだったと話していました。私の中でこの言葉はとても印象に残りました。今まで私は、踏み出す前に多くのことを考えてしまい、結局一步を踏み出すことができず、後悔すると言うことが多かったからです。私自身、踏み出さなければ何も変わらないのだと今まで実感してきました。そしていつも、踏み出さなかったことに後悔してきました。この田中さんの言葉を聞いて、まずは踏み出すと言うことが大切だと感じ、踏み出さなければ、何も始まらないと思いました。だからまず、一步踏み出そう！と強く感じました。

佐藤さんのお話では、発展途上国・開発途上国の呼び方についてとても印象的でした。佐藤さんは、「開発途上国という呼び方では、その国がもう少し開発をすることができる。もう少し、遅れを取り戻すことができるという意味合いがあると思う。」と話していました。しかし、発展途上国と言う呼び方に関しては、「何が発展途中なのか？何が遅れているのか？」ということをお話ししていました。確かにと思いました。佐藤さんは、利便性かどうか、つまり技術が発展している国であるかどうかが先進国であるかと言う判断基準になっていると話していました。便利さでは日本の方が上だが、心の豊かさ、つまりコミュニケーションという面では、途上国の方が上であると話していることから、では、本当の途上国は何なのかと考えさせられました。

派遣前の訓練生との交流では、とても勉強になることが多かったです。訓練生達のお話を聞いて一番印象的だったのは、自己成長の場にしてもいいと言うことです。私の中で、青年海外協力隊は、ボランティア精神が強い、国際交流活動にやる気のある人が参加する者であると考えていました。しかし、派遣前の訓練生達は、自分のスキルアップとしてこの場を利用すると言う人が多く、とても驚きました。交流の中で、もちろんその国の発展を望むが、自分の好きなこと、つまり活動を自分がその国で行うことで、その国も、自分自身も発展すればいいと考えることもいいのだと言うことに新しさを感じました。

この二日間では、国際協力の多様性と言うことを多くの場面で感じました。国際的なボランティア活動であると言うことは、平和構築でもあったと考えていた私にとって、この二日間は大きな考え方の変化のきっかけになりました。国際的なボランティア活動を行うときには、それぞれの文化にあった開発とその国の文化と相手を理解した価値観を押し付けない言語を使用したコミュニケーションもとても重要であると感じました。視野が広がる、充実した二日間となりました。ここから、私なりに一步踏み出した国際的なボランティアを行ってゆけたらと考えています。

### 女の子の暮らしの研究所の講演を通じて感じたこと・印象に残ったこと

この講演では、原発の被害にあった福島から、多くのことを女の子から発信していこうと言う取り組みで、とてもいいなと感じました。イベントの内容を紹介してくださったなかで、「からだミーティング」と言うことを行っていると知りました。自分の体について知

るために、女の子だけでなく、男性も参加できるイベントを行っていると言うことを知り、とても良い活動だと思いました。女性と言う立場は、全員がそうじゃなくても、男性よりも下であると考えられることが多いと思います。それによって、女性が被害に遭うことは多いとは感じていましたが、原発の事故がきっかけで起こる女性の被害もあるとはじめて知りました。講演会のなかで話してくださった、女の子という立場によって思わぬ事件に巻き込まれるきっかけにもなっているということに驚きました。その中で、このイベントの開催と言うのはとても大きな意味を持っていると感じました。男女で考える機会がなかなかない中で、のこのようなイベントはとても重要だと思いました。

講演会の中で、「知れば選択できる。」と日塔さんは話していました。この言葉はとても印象に残りました。知らないから、選択できない、考えることができない、考えない。知っているようで、ここで話していただいたことは知らなかったことが多かったのは事実です。福島で被害を受けた方も知っていれば、他の選択ができた、また今後できると思います。ここで様々なことを知ることができた私たちは、もっと原発について考えなければならぬと思いました。

原発のコストは確かに安いですが、しかし、それ以上に福島の人々の心のコストは高いと思います。原発が日本社会にあることによって、その地域の経済がうまく回るひとつのパーツとなっていたり、一方で大きなリスクもはらんでいたり。原発が危険だと言う理由で、反対してきたが、もっと原発のある地域や深いところまで目を向けなければ行けない問題であったのだと感じました。

女の子の暮らしの研究所では、アクセサリーの開発など地域に密着した女の子の視点から様々な活動をしていることを知れました。身近な形の支援だし、女の子の関心を高めるきっかけになることだと感じます。4年がたつ今、原発事故の記憶が風化されないよう、原発についての関心が薄れないよう私自身でも考え続けていかなければならないし、周りの人も巻き込んでいくことが大切だなと感じました。

## グループ 5

高嶋早紀（お茶の水女子大学文教育学部 1 年）

大村夏美（奈良女子大学人間文化研究科心身健康学専攻博士前期課程 1 年）

加藤明日香（宮城学院女子大学学芸学部 2 年）

高嶋 早紀

お茶の水女子大学文教育学部 1 年

### JICA 二本松での講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと

今回、このイベントに参加する前に最も気になっていたことは国際協力、ボランティアを行う際に必要とされる技術的専門性を自らのキャリアプランの中でどの様に学ぶのか、ということだ。「即戦力」という言葉が就職活動においてよく聞かれるように、専門性を大学在学中に習得しておくことが望ましいのだ、という漠然とした考えで訓練生との交流に臨んだ。しかし、実際に訓練生の皆さんから返って来た言葉は一貫して「専門性は社会に出てからも学べる」「在学中は自分のやりたいことをやりなさい」ということだった。ウガンダへコミュニティ開発分野で派遣された田中さんは新卒で青年海外協力隊員として採用されていたし、北野所長のお話では全体の一割程度は新卒が占めており、数は少ないものの現役大学生も協力隊員として活躍されているという（但し、リーマンショック時に新卒の採用枠を一時的に広げたなど時流はあるらしい）。青年海外協力隊では誰かを助けたい、困難に挑戦したいという熱意が綺麗ごととして受け止められるのではなく、実際に国際協力において大切な要素であると認められて、その思いを現実にする専門性と場所を与えてくれることが良く理解できた。一方で、自分が今大学で学んでいる一つ一つは、今はまだその実生活における有用性や自らの将来との繋がりが実感しにくいだけであって、将来の見えないキャリアを支える基盤になるのだろうかということが僅かばかりではあるが自覚できた。

もう一つ自分の中で強く印象に残ったことはバングラデシュへ環境教育隊員として派遣された佐藤さんの「時が過ぎれば選択肢が奪われる」という言葉だ。自分が興味を持ったことが自分にどう影響を与えるのか、果たしてメリットはあるのか、と熟考することも重要ではあるが、最も大切なことは実際に経験してみることではないだろうか。惰性で可能性を潰すことほど惜しいことは無いと改めて思った。

### 女子の暮らしの研究所の講演を通じて感じたこと・印象に残ったこと

まず、驚いたことはお話を伺った日塔さんの人柄だった。かわいいものが大好きで、しゃべりかたも「普通の」かわいいお姉さん。講演を聞くまでは、「被災者」といえば震災の

辛さを沈痛な面持ちで切々と語る、というようなイメージを持っていた。直接の被災者ではない私が抱いていた被災者像は偏っているのだと実感した。メディアに大々的に取り上げられて声を上げている被災者は被災者全体の何パーセントだろうか。ほとんどが私と変わらない普通の人であり、際立って特別な存在でもないし、可哀想な人でもないのだろう。

日塔さんのお話で深く考えさせられたことは情報だ。福島第一原子力発電所の事故の際、人体に影響する放射線量に関して専門家の意見が分かっていたことは多くの人が知っていた。しかし、そのことが空気の汚染を恐れるあまり「自動車から降りて、息を吸わずに家まで駆けこみ、玄関で深呼吸していた」というような事態を福島の人たちに招いていたことを、原子力の専門家や私たちはどれ程知っていただろうか。また、海外から見れば東日本大震災が日本全体を襲っていると映ったように、福島以外の日本人は放射線が福島全体を襲っているように見えていた。しかし、事実は全く違う。無知と情報の錯綜、そして当事者ではないことの無理解さ。そこから来る温度差が心無い言葉・態度（「福島ナンバーお断り」という看板を掲げたコンビニなど）へとつながるのではないか。

私たちが彼らにすぐ出来る手助けは、正しい情報を流すことだ。スーパーの営業状況など日々の生活に結びついた情報を集め、共有すること。情報の氾濫は混乱を招くが、少なくとも、それらの情報を基に自分の判断基準を作ることが出来る。また、専門家が自分の持つ知識を一般人にも理解できるレベルで噛み砕いて



今も毎日放射線量を計測・周知している

(2015/2/12)

### 国際協力や被災地支援ボランティアについて考えたこと

日塔さんの活動を聞いていて強く思ったことは、「復興」とはただ元に戻すのではなく、災害前よりもリスクに強い、より良い未来を創るプロセスなのだ、ということだ。東日本大震災で失ったものは大きい、そこから得た教訓も大きい。来るべき首都直下型地震や南海トラフ大地震でその反省と教訓がどこまで生かされたのかが試されるのだろう。

東日本大震災の際には日本は世界最大の被援助国となった。しかし、その様に国内が大きな苦難を抱えている場合でも青年海外協力隊は国外に派遣される。何故彼らが国内より国外を優先するかを問うと、「国家同士の相互依存が進む世界において、日本一国ではやっていけない。何時でも助け合うことが必要。」という答えが訓練生の方々から返ってきた。同じ国民が苦しんでいる傍ら、遠い海外の人を助けに行くことは後ろめたさを感じるし、薄情なのではないかと受け止められる場合もある。しかし、目先の現状に集中するのではなく、国益と人間の安全保障を長いスパンで捉えて、今、自分が何をすべきか、出来るの

かをしっかり考えることが重要なのだと感じた。

また、私は心のどこかで国際協力に進むための「正解」を見つけに行ったように思う。しかし、訓練生の方や、共に今イベントに参加した学生たちとの話から実際に分かったことは「正解はない」ということだ。自分の将来や、国際協力ボランティアに対する姿勢に関して、もやもやした気持ちがあるのは当たり前。はっきりしていてポジティブであることはイコール悩みがないという訳ではない。すっきりしているのは自分が表面だけを見て何も考えていない証拠なのではないかと感じた。

### 今後の学習や研究に向けた抱負

訓練生に大学生時代にやっておくべきことは、と問うと、「英語」という回答が多かった。英語は目的ではなく手段、とはよく言ったものの、目的を達成するために必要不可欠なものであることが改めて実感出来た。実際の現場で現地の方と相互理解を深め、信頼関係を円滑に築くためにも、言語とコミュニケーション能力を学生のうちに強化していきたい。また、環境教育訓練生の小手川さんが「仲良くなるきっかけとしての特技を一つ持っておいた方がいい。けん玉でも何でもいいから。」と仰っていたことがとても印象に残っている。自分の得意なこと、自分に合っていることを考え直してみて、何かしらの一芸を身につけることも意識していきたいと思う。

もう一つは、実際に自分の目で真実を確かめるよう努めるということだ。学習・研究をする上で文献や Web で集めた資料はあくまで作成した人のモノであり、真実か虚偽かはその場で判断できず、あくまで自分にとって仮定でしかない。数えきれないほどの情報が氾濫している世界で、自分が真に求める情報を選び出し、自らの価値基準を正しく作り上げることは難しい。出来る限り、自ら行動し、情報が正しいのかどうかを自分の目で確認するようにしたい。

大村 夏美

奈良女子大学大学院人間文化研究科心身健康学専攻博士前期課程 1 年

### JICA 二本松での講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと

この 1 泊 2 日の『国際協力ボランティアを知ろう』というイベントは、私にとって国際協力やボランティアを考える大きな機会となりました。恥ずかしながら、私は今までボランティア活動をしたことがありません。中学生の頃、地域のゴミ拾い活動に参加したことがありましたが、それもご褒美としてもらえる焼き芋が目当てでした。そんな私が今回のイベントに参加したのは、就職活動を始め自分の将来について考えているうちに、日本は豊かで恵まれているな、きっと日本の普通は世界の普通でないはず。まだ日本ほど発展し



ていない国に対して何かできないかなと感じたことがきっかけです。

実際にこのイベントに参加してみて、非常に濃い時間を過ごし、多くを学びました。その中で特に印象に残っていることは、やってみること、一步踏み出すことの重要性と、開発途上国における教育の重要性です。

今回のイベントでは、JICA ボランティア経験者・訓練生の方々と交流させていただく機会が多くありました。国際ボランティアをする上で大事な三本柱として『三脚の法則：1. 相手が喜ぶこと 2. 組織が喜ぶこと 3. 自分がやっていて楽しいこと』という言葉をお授けいただきましたが、JICA ボランティア経験者・訓練生のみなさんは、自分が何をしたいのか明確で、その動機にも芯がありました。その活動が楽しくてやっているのだなど、熱い思いがひしひしと伝わってきました。また、みなさんとの交流を通じて、人生はいろいろだと感じました。中にはこれまでのお仕事を辞めて、参加されている方もいらっしゃいました。みなさん口を揃えて『やってみる』こと、『一步踏み出す』ことの重要性を教えてくださいました。時間は待ってくれません。興味があることならば、まず、『やってみる』。私もそんな風に行動していこうと強く思いました。

開発途上国における支援として、学校の設立や、教育活動は頭に浮かびやすいものかと思えます。しかし、どうしてそんなに教育に力を入れているのか、その重要性を私は明確には分かっていませんでした。水や電気が通っているような都市部でも、国によってはたびたび断水、停電は起こるそうです。いつになれば断水や停電はなくなるのでしょうか。そのような質問をしたときに、ある人がその理由のひとつとして平均寿命が関係あるかもしれないと、教えてくださいました。日本は長寿大国で平均寿命は 83 歳を超えています。しかし、アフリカの平均寿命は 50 歳前後の国も多いです。平均寿命が短いと、次の世代に教育することが不十分という可能性があります。日本社会を想像してみると、管理職はおじさんとよばれる年代の人が多いです。それぐらいの年齢で人が死んでいたら、国もなかなか成長しないというのは、理解できません。平均寿命が短い理由はいくつかありますが、その理由のひとつは HIV でしょう。アフリカでは今も HIV の感染が問題となっていますが、HIV に関する知識がないことが、HIV が広まる大きな原因のひとつでしょう。国が成長するためには、学校教育はもちろんのこと、HIV など性に関する教育も重要なのだなと思いました。

### 女子の暮らしの研究所の講演を通じて感じたこと・印象に残ったこと

2011 年の東日本大震災時、私はカナダに留学しており日本にはいませんでした。あの震災の時はカナダでも大きく報道され、朝ホストマザーが、日本が大変よ、と慌てて教えてくれたことを今でも覚えています。3 月下旬に帰国した際、テレビを点けて驚きました。CM がすべて AC ジャパンのものだったのです。色んなことが自粛されて、日本中がどんよりしていました。そんなことに驚くぐらい、私にとって震災は現実的でなかったのです。震災当日、日本にいなかったことや、その後も報道でしか情報を得ておらず自分の目で、

生で見たわけでもないことから、日本人としてこんなに震災についてリアリティーがなく、よいのかなと思っていました。震災から約 4 年経ってしまいましたが、今回女子の暮らしの研究所の講演を聞いて良かったです。

女子の暮らしの研究所の代表、日塔さんはすごくかわいらしく、いまだき女子という印象を受けました。正直な所、こんなにかわいい人がこのような会社を設立して活動してらっしゃるのだと意外に思ってしまいました。原発の問題があつてから、原発反対というデモを多く目にしてきましたが、そのような人たちを見て、言っていることは正しいかもしれないけど、その熱さ故、私は聞く耳を持っていませんでした。それって良くないことかもしれませんが、日本人ってそのような人が多いと思うんです。日塔さんは、講演の中で、はげしい活動家ではなく、ぬるくしていろんな人が触れる温度で伝えていきたいと仰っていました。いろんな人がそれぞれの伝え方で伝えていき、もっとみんなが震災や原発について考えられればなど、お話を伺って思いました。

この体で将来子どもを産んで大丈夫なのだろうか。将来結婚するとき差別されない？自分の子供たちも差別されない？という不安が福島の女の子たちの中ででているそうです。同じ女性として憤りを感じました。どうして大人たちは原発を許してきたのだろうと。もちろん原発にメリットはあります。デメリットもあります。きちんとそれらを考えて選択したのでしょうか。原発の事故があつたとき、私は、「国はダメだな」、とか、「東電はどうなっているんだ」、とっていました。でも、日塔さんは国が悪いとか、東電が悪いではなく、無知だった私が悪いと仰っていました。政治のことは難しそうだからわからない。興味ないしなんでもいいや。という考えがあつたから、選択できたときにしなかった。その言葉を聞いて、私も無知だなと自覚しました。選ぶ機会を放棄しながら、何かが起こった時に文句を言うのは違うのではないかなと思います。自分たちの将来、その先の子孫のためにもきちんと物事を知って、選択していこうと思いました。

### 国際協力や被災地支援ボランティアについて考えたこと・今後の学習や研究に向けた抱負

今回の講演を通じて、国際協力には様々なやり方があるのだと感じました。最近では、東南アジアや南米に進出している日系企業もありますが、それも現地の雇用を確保することで、経済の潤滑に影響を与える、ひとつの国際協力の在り方と考えられます。今回 JICA 二本松に行き、青年海外協力隊という選択肢も自分の中でできました。これから、自分なりの世界との関わり方を模索していきたいです。

この 1 泊 2 日の『国際協力ボランティアを知ろう』というイベントを通じて、何をもって『豊か』なのか、考えさせられました。青年海外協力隊経験者の方のお話の中で、現地の彼らは、確かに日本ほど便利な環境で暮らしていないけれど、心は日本よりも豊かだったというお話がありました。私は毎日電車で通学していますが、車両の中はいつも同じ光景です。疲れた顔の人が多く、9 割の人はスマートフォンをじっと見つめています。

女子の暮らしの研究所代表の日塔さんも、原発問題を踏まえて、暮らしの見直しについ

てお話されてきました。日本人は長時間働いていることが問題となっていますが、あんなに遅くまで働かなくてはいけないのでしょうか。働いている間、電力は使われています。そして次の日には疲れた顔でまた電車で揺られスマートフォンを見つめるのです。

自分の中で、どのように過ごすのが幸せなのか、一度じっくりと考えてみたいと思いました。

## 加藤 明日香

### 宮城学院女子大学学芸学部 2年

今回のイベントに参加し、JICAの方々や他大学の方と様々なお話をすることができて、国際協力やボランティアに対する自分の考えが深まりました。

まず、所長さんのお話でボランティアとは何か、なぜボランティアをするのかという話をされ、いきなり考えさせられました。ボランティアとは、自主的に無償で人のためになる活動をするものです。つまり、「自主性・無償・公益」が揃っている活動のことです。私は今、途上国への支援と子どもの遊び支援の2つのボランティア活動を継続して行っていますが、私がボランティアをする理由は、その3つの要素の他に、社会性や将来に役立つことを身につけたいという思いからです。

しかし、それ以外にもボランティアをする意義、そして活動する上で重要なことがあるということ、所長さんと学生の対話や田中さん、佐藤さん、そしてGirls Life Laboの日塔さんのお話を聞いていて気づかされました。それは、自分自身が楽しむということです。それは当たり前のことかもしれませんが、私は少し、ボランティアは人のためにならなければいけないとか、失敗しないように、ということばかり考えていた部分もあったので、このことを聞いた時少しはっとしました。また、永井さんがおっしゃっていた、ボランティアの3本柱（大衆が喜ぶ、組織が喜ぶ、自分が喜ぶ）のお話も共通する部分がありました。確かに楽しくなければ、活動していてもつまらないし、より良い活動を積極的に行うことはできないでしょう。ですから、私は2つのプロジェクト活動を行う上で、メンバーと一緒に楽しむということも大切にしながら、途上国の支援になる取り組みや子ども達の成長のきっかけを作れるような活動していくべきだと改めて思いました。

また施設の見学や訓練生との交流で、JICAの活動や訓練についても深く知ることが出来ました。

### JICA 二本松での講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと

まず二本松訓練所を訪れて最初に思ったことは、訓練所が予想以上に綺麗で快適な施設だということでした。施設自体が山中にあり、事前研修に集中できるよう工夫されていて、

立地条件自体が訓練になるというのには感心しました。講義は語学が中心とのことですが、専門的な知識を身につけるための実験室や資料が置いてある部屋があったり、言語ごとに教室が分かれてあったりしました。このような施設のおかげで、専門的な知識や語学力を磨き、各国へ支援に向かうことができるのでしょうか。また、専門的な知識や資格がなくても、意欲があれば支援活動に携わることができるのも、事前研修が充実しているからではないでしょうか。さらに、この訓練所で、訓練生たちはもしかすると高校や大学以上に勉強しているのではないかと感じ、私も一学生として、もっと勉強にも力を入れなければと思いました。

加えて施設が素晴らしいということだけでなく、訓練生の皆さんの意欲も素晴らしかったです。国際協力ボランティアなので、意欲的な人が多く集まるのは当然のことですが、訓練所の皆さんは少し機会があれば積極的に話しかけてくれたり、交流の時間は質問に丁寧に答えてくれたりしました。ただ、意欲的といってもガツガツとキチキチとしているのではなく、他の学生さんもおっしゃっていましたが、いい意味で楽観的で、まさに活動を楽しんでいるという感じでした。そして、ある訓練生の方が、JICAの訓練所では多方面で活躍している人が集まっているから、良い交流ができるとおっしゃっていました。本当にその通りで、訓練所の雰囲気も和気あいあいとしていました。JICAの支援活動は、交流ができ、知識も身につくので自分のためにもなる、理想のボランティアなのではないでしょうか。

さて、今回の活動を通して私は、国際協力をする上で大切なことは大きく3つあると考えました。それは、異文化理解・行動力・知識の3つです。

1つ目の異文化理解についてですが、私自身は大学で海外の文化について学んだり、海外の人と交流したりする機会があるので、異文化理解が大切だというのはいつも考えていました。今回は田中さんと佐藤さんのお話を受けて、改めてそれを実感しました。お二人のお話の中で、現地ではお金を集金する際に期限を設けてもなかなか期限までに集まらなかったり、ゴミのポイ捨ては神が自分の手にそうさせたという考えを持っている人がいたりした、というお話がありました。それは、私たち日本人からすると考えられないことですし、私も少し驚きました。しかし、それを自分の価値観からただ否定するのでは、相手も聞いてくれないだろうし、なかなか解決には繋がらないと思います。そのために、異文化だということ、別な価値観を持っているということを理解し、その上でどのように対処すべきなのか考えるべきです。途上国を支援する際に、その国の文化や良さ、伝統を消してしまわないようにするためにも、異文化を尊重することが大切です。

2つ目の行動力に関しては、国際協力に携わるとなると危険なことや不安なこともあると思いますが、まずはやってみるという言葉が心に残りました。考えすぎて行動しないよりは、行動してみないことには実際はわからないのではないかと思います。また、現地での活動は、現地の組織の一員として活動するようなので、その人自身の働きによって活動や成果が変わっていくのだと感じました。ですから、私も考え過ぎるのではなく、やりたい

と思ったことは行動に移すようにして、行動力を身につけていこうと思います。

3つ目の知識については、上記で述べたように JICA では事前研修で知識を深めているということから考えました。現在途上国では、専門的な知識や技術が求められていて、それと同時にその国の文化や言語の知識も必要になります。それは先程述べた異文化理解と共通する話でもあります。今回訓練所で様々なことを学び、やはり自分はまだまだ知識が足りないということを痛感し、途上国の支援をする上でも、私自身の将来のためにももっと色々な知識を身につける必要があると思いました。

### 女子の暮らしの研究所の講演を通じて感じたこと・印象に残ったこと

日塔さんの講演を聞いて、私が強く感じたことは、自分は今まで原発のことや放射能のことは全然知らなかったうえに、それ自分のこととして捉えてなかったということに対する恐怖でした。

日塔さんのお話では、地震があった時、原発が爆発した時の体験談を聞きました。私も宮城に住んでいるので地震がどれほど恐ろしい揺れだったのかは知っていましたが、原発が爆発した時のその場にいた人からお話を聞く機会は、今回が初めてでした。情報の遅れ、不確かさ、無知が引き起こす問題、差別など、実際に体験したお話を聞くことで、その恐怖や問題点を実感することが出来ました。

情報の遅れや不確かさは、私も経験しました。電気が使えない間はラジオのみで、大半の情報は地震の震度や速報などばかりでした。また、放射能についても海藻を食べれば大丈夫といったことや、外に出れば放射能に当たるなど、偽情報のようなものも流れていました。やはり、混乱した状況になると情報が錯乱するのだと思います。

だからこそ、事前に原発や地震、そして津波についての知識や避難訓練が必要です。お話の途中で、原発が爆発したらどこに避難するの？と尋ねられたとき、私たちは誰も答えられませんでした。その時はひやっとしました。宮城にも原発はあるのに、全くといっていいほど私には知識がありませんでした。福島であれほどの被害があったにもかかわらず、やはり私も含めて原発の危険性やその存在を身近に感じていなかったのでしょう。なので、今はどこの原発も停止しているようですが、少しずつでも自分で知識を身に付け、周りにも広めていこうと思います。私事ですが、最近大学の方で、世界に震災と復興について英語で伝える活動を行っている団体にも関わることになったので、世界にも今回の経験を生かして広めていきたいです。

震災時の体験談のお話の他に、Girls Life Labo でどのような活動を行っているのかも聞き、その活動のコンセプトが素敵だと思いました。可愛いから活動する、周りと同じ温度で活動するということは、ボランティアの3本柱と同じだと思いました。

きっかけは自分のためであっても、活動していると誰かのためになっていたり、活動が楽しい・自分らしいものであったりするのは、自分が充実した活動をするための根本的で大切なことだと思います。

また、周りと同じ温度差というのは、活動が広まりやすく、メンバー全体で活動しやすくなると思います。あまりにも熱が入りすぎたり、専門的すぎたりすると、活動を知らない人や知識があまりない人は、引け目を感じてしまいます。私も団体で活動している時に、組織内の活動に対する温度差を感じることもあります。自分だけが突っ走ってしまっても意味がないですし、うまくいかないこともあります。なので、メンバー同士で意思疎通をしっかりと取りながら、より楽しく活動できるように心がけようと思います。外部に向けて活動するときは、相手の目線になって考え、より活動が広まるように工夫していきたいです。

### 国際協力や被災地ボランティアについて考えたこと

これからの国際協力について、佐藤さんのお話と、最後の学生でのディスカッションの発表で、「豊かさと引き換えに失った物」というお話が出てきましたが、今の日本は便利な世の中である反面、心の豊かさや人とのつながりが希薄な社会になっているように感じます。それが、先進国や豊かだと言われている地域の実情です。今回のイベントに参加した学生の中で、途上国への支援とは、便利さを与えるものだから、その代わりに心の豊かさを奪ってしまうことになるのではないかと、ということを考える学生もいました。確かに、技術支援や道路整備、建築の支援などは、便利さや生活改善になりますが、結局は都市化を推し進めているようにも思えます。だからといって支援をしないのでは今の途上国の現状を打開することはできません。そこで、これからの国際協力には、心の豊かさや伝統を守れるような支援が求められているのではないかと私は考えました。例えば、Girls Life Labo の伝統工芸を生かしたアクセサリーのような、伝統を現代の商品に合わせた活動や、コミュニティ作りを通して人とのつながりを作るなどの活動ができるのではないのでしょうか。

途上国ということは、まだ日本のような豊かさを失った先進国にはなっていない、ダイヤモンドの原石のような存在です。失敗があるならそこから学ぶことができます。だからこそ、私たち先進国に暮らす人々の支援が必要なのだと思います。

### 3. イベント終了後参加学生 アンケート集計結果





## イベント終了後参加学生アンケート集計結果

イベント終了後に、参加学生を対象に、イベント参加経緯と満足度や関心分野についてアンケートを配布し集計を行った。

本イベントを知った経緯としては、メーリングリスト、ポスター、大学関連部署や教員などからの直接の誘いと多様な方法でイベントを知ったことがわかる。本イベントに参加した理由としては、国際協力と JICA ボランティアへの関心が最も高く、次いで、国際協力に参加したい、東日本大震災関連 NGO のお話が聞きたいとの声が多かった。

本イベントの満足度は 19 名中 15 名が大変満足、4 名がほぼ満足と満足度の高いものであったことがわかる。開催時期・場所については、13 名が大変満足、5 名がほぼ満足であったが、他の学内イベントの開催が重複してしまったことへのコメントがあった。

関心分野としては、国際協力全般が最も高く 16 名、国際協力ボランティアが次いで 11 名と高かった。開発途上国の関心分野としては、具体的にジェンダー、教育問題、貧困など、教育、出版、水環境衛生、女性のエンパワメント、東南アジアでものづくり、人材育成などが挙げられた。

記述部分としては、「様々な面でいろいろなことをまなびとるところがあり、とても良かった。」「視野を広げる目的を果たせました。」など、具体的な国際協力ボランティアに関する知識に限らず、訓練生の国際協力ボランティアに対する姿勢などから多くを学ぶことができたことが伺える。

本イベントをどのように知りましたか（複数回答可）	計
学内メーリングリスト	5
ポスター等の掲示	7
大学の HP	1
大学関連部署・センター・担当教員などからの直接の誘い	6
友人・サークル仲間等の誘いまたは SNS 情報	4
その他（記述をお願いします。）	0

本イベントに参加した理由は何ですか（複数回答可）	計
国際協力に関心があるから。	15
JICA ボランティアに関心があるから。	14
国際協力に参加したいから。	10
JICA ボランティアに参加したいから。	4
東日本大震災関連 NGO のお話を聞きたいから。	9
JICA 二本松訓練所に行ってみたくから。	6
福島県に行ってみたくから。	6

その他	2
-----	---

<b>本イベントの参加満足度は</b>	<b>計</b>
大変満足	15
ほぼ満足	4
あまり満足でない	0
改善してほしい	0

<b>本イベントの開催場所・時期について教えてください</b>	<b>計</b>
大変満足	13
ほぼ満足	5
あまり満足でない	0
改善してほしい	1

<b>関心分野</b>	<b>計</b>
国際協力全般	16
国際ボランティア	11
東日本大震災からの復興・ボランティア	6
開発途上国に関わること（記述をお願いします。）	9

## 4. 写真





田中氏（元青年海外協力隊員：派遣地・ウガンダ，職種・村落開発普及員）の講義  
©JICA



佐藤氏（元青年海外協力隊員：派遣地・ Bangladesh，職種・環境教育）の講義



訓練生との交流



©JICA

朝の集いに参加



(株) GIRLS LIFE LABO 「女子の暮らしの研究所」代表、日塔氏の講演



©JICA

北野訓練所所長と記念撮影

---

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成  
ー女性の役割を見据えた知の国際連携ー

大学間連携イベント「国際協力ボランティアを知ろう」  
実施報告書

2015年3月

お茶の水女子大学グローバル協力センター発行

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1

Tel/Fax: 03-5978-5546

Email: [info-cwed@cc.ocha.ac.jp](mailto:info-cwed@cc.ocha.ac.jp)







